

イギリスの新聞はどのように人気歌手Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか : [The Times], [The Illustrated London News], [Punch, or the London Charivari] に見る報道(2)

KIDO, Tomoko / 城戸, 朋子

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

51

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

66

(発行年 / Year)

2004-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021012>

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

—[The Times], [The Illustrated London News],
[Punch, or the London Charivari] に見る報道—(II)

城戸 朋子

内容構成 (続き)

- 11 1849 年の記事
- 12 1850 年の記事とアメリカへの出発時の描写
- 13 アメリカにおけるジェニー・リンドに関する記事。
- 14 1858 年から 1887 年の記事
- 15 まとめ

注

参考資料

11 1849 年の記事

下記の「Punch」は他の新聞が扱っていないことを記事にしている。いずれの新聞もジェニー・リンドの歌手としての才能、そして人格を褒め、あるいは指揮者がオーケストラを上手く統率したかどうかについて論じてはいる。しかしオペラの解釈において、当時指揮者あるいは演出に関しての指示があったのか不明である。プログラムに指揮者についての記載はあるが、演出家は問題にされていないからである。その点を象徴しているのが『ノルマ』の解釈についての意見の分裂である。意見が二分しているのであるが、そこで問題になっているのは「誰の演出」というよりも「誰の演じた〈ノルマ〉」が問題視されているのである。これはまさにこの時代が Prima Donna の時代といわれたように、主役の女性歌手を目立たせ、それによって観客を引き寄せて人気を作っていたことを象徴している。それが劇場の人気として繁栄したのである。この 1849 年の Vol. 16 (p. 157) に掲載されている脚本は、珍しくリンドが歌ったモーツァルトのオペラ『魔笛』のアリアについて、リンドの解釈に関する論争を、法廷での証人尋問の形式で物語っている。法廷における証人尋問形式を取る手法は、リンドがバンと実際に法廷闘争をしたことに対する皮肉を込めた表現であろう。

11-1 「Punch」1849年（1月～6月）Vol. 16 : 「The Nightingale that Sings
in the Winter」(p. 15)

4行詩である。(図1)

水は荒涼とし、結晶となった雪は
輝き、曙の燃え立つように赤らみを変えず。
氷柱のプリズムの色が太陽の陽の光の中で映える
厳しい寒さの中で歌を歌う鳥たちが密造される、一羽を除いて。

…… (略) ……

いまやこのナイチンゲール（夜鳴き鶯）は珍しく、冬に歌う
未だ天使ではないが、羽はない
そして風に乗って何処へでも旅をする彼女の名前は
親切で、寛大な、親愛なるジェニー・リンド

といった具合に終わる。彼女の奏でる音楽を褒めちぎっているだけではなく、慈善事業に熱心で寛大な心と優しさとを礼賛しており、憧れ、そして崇拜の対象にさえなっている。

11-2 「Punch」1849年（1月～6月）Vol. 16 : 「Jenny Lind in Trouble」(p.
157)

「問題を起こしたジェニー・リンド」

マールボロー・ストリート Marlborough Street——治安判事のフォードウィック氏は先週の金曜の朝、法廷の席に着き、ジェニー・リンド嬢（ここではMiss）に対して、言葉による暴力行為と不法行為の罪に対して出廷を求める召喚状を適応した。フォードウィック氏は（明らかに動揺している）直ちに召喚状を認め、ジェニー・リンドは告訴に応えるべく2時に法廷に姿を現した。レディーはスウェーデン大使と6名の主教と共に事務所に現れた。

エクセター・ホールの多くの模範的人物が群集の中にいた。ラムリー氏と Her Majesty's Theatre の主だったメンバーの幾人かが出席した。

証人台に立ったのは原告の作曲家ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト、フォードウィック氏（モーツァルトの子孫ということになっている）、モーニング・ポスト氏、モーニング・ヘラルド氏、モーニング・クロニクル氏、タイムズ氏の6

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

氏である。

証人の名前から判断して、これが如何なるものか直に分かるはずである。ジャーナリズム、つまり当時の新聞である。

これはモーツァルトのオペラ『魔笛』の aria の解釈をめぐっての評価が分かれたことを表している。

現在は存在しないが、19世紀には演奏会場としてよく知られ、イラストも多い Exeter Hall での演奏会で、リンドがモーツァルトのオペラ『魔笛』からの

aria を歌ったことにあったようである。モーツァルトは、この世の人ではないが、気になったので、いてもたってもいられず、抗議するためにもう一度この世に姿を現すのが義務と感じたのでやってきた。——と言わせている。

THE NIGHTINGALE THAT SINGS IN THE WINTER.



図1 「冬に歌うナイチンゲール」

フォードウィック氏：モーツァルトの琴線が彼女の心の琴線として彼女に与えられてきた。

それにもかかわらず、彼女は——(ここで証人は口ごもり、感情的に高ぶり、震えて涙を流した)。しかし、彼の証言を求めた。

モーニング・ポスト氏：『魔笛』からピックアップした作品でクラシック・コンサートを開いたジェニー・リンド嬢は衣装を着て舞台上に現れたが、躊躇っているように思われた。「聴く耳には生気がなく、オペラ的とは響かなかったので、オペラ作品そのものへの関心は薄れた。」もし彼女が、現在のやり方を踏襲するのであれば、リンド嬢は「この記念碑的芸術作品を彼女の力と評判で台無しにしてしまうであろう。」

モーニング・ヘラルド氏：「この薫り高き美しい音楽の効果は弱められてしまった」と断言した。「観衆は熱狂するばかりであった」——「冷ややかな無関心はその夜を支配した」

モーニング・クロニクル氏：ジェニー・リンドは声においてもスタイルにおいても完璧であったと宣言した。しかし「演奏の性質から行って、彼女の魔力はその影響力を失っていた。」

タイムズ氏：「演奏は全体的に既存のやり方に信用を与えるものであった」という意見であった。

以上が告訴に対する証言内容である。ジェニー・リンドは反論を求められた。彼女は B-h - p ないし N-r - i c h (と理解されたが) と応えようとしたが、弁護士が話さず

に歌えとアドヴァイスした。

そこでジェニーは、Non Paventur ambil figlio と発した。判事は椅子の背に深く沈むように腰かけて——警官は互いに抱き合い——法廷全体は感極まり、解決した。——この時とばかり、前述の B-h-p がジェニーを馬車に乗せ、凱旋して法廷から去った。

ウォルフガング・アマデウス・モーツァルトが救われないことは明白である。しかし彼は主教の裁判官と Exeter Hall の重要な小市民の観衆に厳しく訴える。彼らは単純なジェニーに真紅の劇場と劇場用ドレスの罪を絶えず説諭することによって、絶妙な女優を冷たい形式主義者に変貌させた。こんな決まり文句はナイチンゲールを殺すに違いない！

この戯文から判断すると、モーニング・クロニクル、モーニング・ヘラルド、モーニング・ポスト、の順に批判度が高くなっているが、さらにこのような文章を載せるのであるからパンチはリンドのモーツァルト解釈に対しては全面的に肯定しているとは思えない。タイムズが比較的全体的にリンドを支持している。あるいは批判しないように心がけていると言ったほうが適切かもしれない。残念ながら、『ノルマ』に関するリンドとグリンの支持者の対立が、ジャーナリズムに表れたのかは、現段階では不明である。ただ Exeter Hall が舞台芸術を上演するホールではないために、そこでオペラを上演し、そのアリアを歌ったのではなく、コンサートの全体のプログラムの中の一曲として、アリアだけを取り出して歌ったために起こった問題なのではないであろうか。彼女の持ち味は演技にあったのであるから、ドラマチックな表現を取り去った声だけ、つまり演奏会でのアリアだけの演奏では、味気ないと感じさせたのであろうか、それとも歌い方に欠陥があると思わせたのであろうか。

この年は前年と同様イギリスの地方都市での慈善演奏会に関する記事である。彼女がますます人気を博していることを物語っており、その人気の要因のひとつに、演奏会の収益金を寄付していることである。まずノーリッチでは2回演奏会を開き、£1,859 の収益を上げ、£1,250 以上を慈善のために寄付している。これまで2年間に彼女が寄付した総額は£12,000 以上に上る。ノーリッチという町は小さいが、西海岸に近い風光明媚な地域で、イギリスの風景画の作風を創り上げた土地でもある。

さらにノーリッチはリンドにとっても意味のある町で、演奏会の滞在中に寄宿した教会の関係者が彼女のイギリスでの後見人になるのである。

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

11-3 「The Times」の1849年度の記事

Punch はいろいろな解釈のあること、そして新聞によってそれぞれの特徴があったことを法廷での証人尋問の形で言及しているが、「The Times」は相対的にジェニー・リンドに対して好意的であるために、作品解釈に関して異論のあることは述べているが、他紙で批判されたモーツァルトのアリアの解釈については一言も触れていない。

1月27日：「Jenny Lind in Norwich」

この記事は「Punch」と同じ内容を伝えている。

この都市で今週リンド嬢が援助した2回の演奏会の利益は総額£1,859.11sで、必要経費を除いて£1,250以上が慈善のために残るであろう。過去2ヶ月間に、ジェニー・リンド事務所を通して慈善事業に寄付した総額は£12,000以上になるだろう。

1月30日：「Jenny Lind Concert at Birmingham」

先週の金曜に開かれたクイーンズ・ホスピタルの今週の会議で、クウィーンズ・カレッジの副学長ジェイムス・T.ロウ師の議長の下で、今月29日に特別会議が開かれ、前年の12月28日にターンホールで開かれた演奏会による、リンド嬢の惜しめない収益の寄付に対して、その人柄の良さを褒め称え、篤志家の寄付奉仕を記念して慈善団体の玄関に記念碑を設置する提案をした。必要経費差し引後の総額£1,070が慈善事業の理事の手に収められた。この問題についての各種委員会が招集され、……略……その会議の決定に対して、この教養ある愛すべき女性、ジェニー・リンドから次のような感謝の手紙を教授会は受け取った

としてその手紙を掲載している。

Liverpool, January 7, 1849

“Sir, ---I have great pleasure in acknowledging the receipt of your letter of yesterday. It is indeed a high satisfaction for me to hear that the concert has had such an excellent result, and that I have had an opportunity of being useful to your valuable charity.

“I beg to assure the members of the weekly board that I am highly sensible of the honour conferred on me by their vote of thanks, and truly grateful for their very kind wishes for my future happiness.

I am, Sir, yours truly,
JENNY LIND.

“William Sands Cox, Esq.”

この後に慈善委員会のメンバーの名前がずらりと掲載されている。実はこの手紙は英語で書かれているが、コメントとして、彼女の英語が素晴らしいとその文章力を褒めているのである。この書簡が初めから英語で書かれたのかどうか疑問もあるが、もし英語で書いたものでなければ、誰かが翻訳したものであろう。彼女の私信を見ると、かなり通じればよい程度の英語の手紙がある。したがって、誰かが目を通した英文の手紙の可能性はある。

2月10日：「Mademoiselle Jenny Lind」

——バーミンガムのターンホールでメンデルスゾーンのアラトリオ『エリア』を歌い、最大級の熱狂的な拍手を受けた。この類まれな声楽家は日増しに人気を増大させている。ホールは過剰の入場者が押し寄せ満員となり、入場券はかなり高価であったにもかかわらず、数百人が入場できなかった。他の歌手も十分期待にこたえており、指揮はベネディクトであった。収益は£1,200を大きく下回ることはない。(12行)

5月19日：「Mademoiselle Jenny Lind」

DoverのHollyer's London Hotel, に火曜日に到着し、水曜にはサウス・イースタン会社の蒸気定期船プリンス・モウド号でパリへ行くためにカレに向けて出帆した。(6行)

その後演奏会と、その他の用件でイギリスに滞在し、5月19日ドーヴァーから小型蒸気船でフランスに向かった。

5月31日：「Jenny Lind」

——フランスの「デバ」紙からの引用で、ジェニー・リンド嬢がパリに滞在中で、火曜(31日)にスウェーデンへ帰国するとあるが、イギリスでかくもアイドルとして話題になり、結婚問題も上がったが破綻した、という。(6行)

6月20日：「Jenny Lind」

——彼女のことを偉大なる俳優にして歌手と表現し、彼女の異常なまでの人気により、彼女の肖像画、その他当時としては写真が未だなかったのが、リンドの名を付した小物類が作られていたようである。彼女の肖像画⁹をロイド氏が発表したことを報じている。この肖像画は芸術作品としても最高の水準を行くものである、と述べている。(9行)

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

9月5日：「Jenny Lind at Ems」

— ジェニー・リンドが先月25日(日曜)かつて滞在し温泉療法を行ったことのあるエムスで、貧しい人のための慈善演奏会を行った。入場券はドイツとしては通常より高かった。(例えば、平土間で2ターラー、ギャラリーの立席で1ターラーが普通)。それでも演奏会場のクアザールは満員であった。聴衆は心から楽しそうに感激していた。この春ロンドンを離れて以来一般公開の場で歌う最初の演奏会だと思う。かつて健康の優れなかった時期があったようであるが、かなり回復しており、医者者の忠告にもかかわらず演奏会をエムスで行ったと思われていた。彼女は非常に魅力的に歌い、完璧なまでの情熱を発揮していた。しかし健康が優れないのか、彼女の声には、以前のような新鮮さと豊かさを感じられなかった。ホルドー公爵夫妻がかなり大勢の人たちと訪れ、リンドは演奏会の終わりに、公爵の要望に応じて挨拶した。(20行)

この記事などは他国での演奏会の様子を報じたものである。

そして「The Times」は外電を通して、イギリスでアイドルといわれている、とフランスの報道を紹介している。さらに彼女の思い出になるようなプロマイドに相当する肖像画や小物類が作られて売られた様子が伺える。アイドル・グッズの始まりである。

11-4 「The Illustrated London News」の1849年の記事

1849年1月6日：「M^{lle}. Lind」(p. 10)

このチャーミングな声楽家はリヴァプールで5日に、ある病院を援助するための演奏会で歌った。29日にはExeter Hallでのバルフェ氏の慈善演奏会で歌うことに同意した。ラブラシュ氏とタールベルク氏とも競演する。2月の初週にはヴォーチェスターのカレッジ・ホールで開かれる演奏会に無料で出演することになっている。当地の診療所を援助するための演奏会である。リンド嬢は昨年9月のフェスティバルに出演できなかったことを大変残念に思い、この機会に奉仕することを申し出た。当時£50を送っている。リンド嬢は、今シーズンは去年より早いうちにHer Majesty's Theatreに出演する予定で、ラムリー氏がマンチェスター滞在中に契約を交わすはずである。(11行)

1849年1月13日：「Music」— Sacred Harmonic Society (p. 26)

「M^{lle}. Lind」

リンド嬢は土曜の朝、リヴァプールのSouthern and Toxteth Hospitalの基金援助のために、アンフィテートルで演奏会を開いた。大変な盛況で£1,200の収益を上げ

た。リンド嬢は無料で7回も歌い、3回もアンコールを受け、最後は国歌で締めくくった。46連隊の楽団が序曲を演奏し、ド・ラツォノ夫人、ベレッティ氏、D.ラバッチェ氏も歌った。コーブランド氏が気前よく劇場を貸与し、価格は1ギニー半と5シリングであった。夕方には病院の院長と委員が参加し、リンド嬢の親切に対して感謝の挨拶をした。隣町のニューキャッスルでリンド嬢は29日のバルフェ氏のExeter Hallでの演奏会に先立ち歌う予定である。2月のリンド嬢の予定はヴォーチェスターとノーリッチ両市の慈善演奏会で歌う。(13行)

1849年2月3日：「Music」——Mr. Barfe's Concert (p. 74)

——Jenny Lind——Exeter Hallでのバルフェ氏の慈善演奏会にジュニー・リンドがヴォランティアとして無料で出演し、去年のオペラシーズン終了以来地方巡業の間、彼の有能で熱意に満ちた奉仕活動に感謝しての出演である。ホールは満員であった。多くの著名人が出席していた。特にウェリントン公爵が入り口で拍手の挨拶を受けた。リンド嬢は「観衆の中で観察され」、最初に歌ったのは『フィガロの結婚』からのアリアであった。演奏は素晴らしかったが、彼女としては成功した演奏ではなかった。彼女の次のアリアは有名な『ノルマ』のアリア「Casta Diva」でこれは強烈な印象を与えた。マイアベーヤのオペラ『フィールカ』からの声と2台のフルートのための3重奏で第一部が終わった。(この3重奏をオペラ『フィールカ』としているのは『シレジアの野営』の誤りである「フィールカ」はオペラ登場人物の名前であることは前述した通りである) 第二部でジュニー・リンドはラブラシュと有名なブフォンの二重唱「Com pazienza」を歌った。これは生徒が歌を習う情景を歌っており、あらゆるテクニックを示しているのが楽しいが、このように容易くしかも優雅に歌われたのを今まで聴いたことがない。素晴らしいnaïvetéと茶目っ気で表現した。バルフェ氏が彼女のために作曲したイギリスのバラード『寂しい薔薇』を歌って締め括った。言葉の運びも表現もエレガントで印象に残り素晴らしかった。余談だが、彼女の演奏は熱狂的に受け止められ、今夕の興奮をクレッシェンドに持っていった。オーケストラもよく、バルフェ氏の二曲の序曲も声楽を伴う曲も上手く演奏した。

他の演奏者もすでに名前を挙げた歌手以外に、さらに5名の名前が挙げられている。

1849年2月17日：「Mademoiselle Jenny Lind at Worchester」(p. 109)

イラスト入りで1頁の1/3のスペースを取る。

2日の金曜の夜、ヴォーチェスターのカレッジ・ホールで行われた診療所援助のために無料演奏会を開いた。リンド嬢は前日にロンドンより来訪し、病院の部長夫妻から歓待を受けパーティーを開き、選ばれた市民が招待された。

ヴォーチェスターの市民は彼女の寛大な行為を忘れないために、一組の磁器セット

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたかをリンドに贈った。ヴォーチェスターは磁器で知られているのか、その磁器セットのイラストが描かれている。演奏会の収益金 £800 が寄付された。

1849年3月3日：「M^{lle}. Jenny Lind」(p. 139)

月曜の午前シュルーベリーでの演奏会と火曜の午前チェスターでリンド嬢は演奏会を開いた。どちらの演奏会でもチケットの収入は受け取らず、2つの演奏会の受け取りは £1,200 ギニーであった。彼女に対する歓迎は少しも弱まってはいなかった。リンド嬢以外にも多くの演奏家が参加したが、おおむね地方都市マンチェスターで活躍している人たちで、ベネディクトが指揮した。木曜(3月1日)はダービー、火曜(6日)はノッティンガム、8日はシェフィールド、12日はケンブリッジで歌う。ダービー、ウェイクフィールド、ノッティンガムではF.ラバッチェが参加する。ケンブリッジではベレット氏^{ベレット}が参加し、全ての演奏会はベネディクト氏が指揮する。

ロンドンのアマチュアは地方都市だけで演奏会をするのではなく、ケンブリッジの後3月と4月に Exeter Hall でも6回演奏会を開くので喜んでいる。Exeter Hall でリンド嬢はヘンデルのオラトリオ『メサイア』とハイドンのオラトリオ『天地創造』を初めて歌い、その他にもドイツの作曲家のオペラ作品から、歌う予定である。共演者はウィリアム姉妹など。スタウディグル氏にも競演の要請を出しており、ヴィーンからの返事を首を長くして待っている状況である。ベネディクト氏はリンド嬢の6回の演奏会の指揮を執ることになっている。(21行)

この後にラブラシュ氏とタールベルクのツアーの予定が書かれている。(タールベルクは当時リストと並び最も人気のあったピアニストで。)

1849年4月7日：「Music」——「M^{lle}. Lind's Concert at Exeter Hall」(p. 230)

Exeter Hall のリンド嬢の演奏会が火曜の晩に開催され、華やかに満員の盛況であった。女王陛下とアルバート公もご臨席になり、国歌が演奏され、最初の出だしをリンド嬢が歌い忠誠を誓った。そのほか多くの高貴な人々が参加され、(著名な楽器奏者の名前が並んでいる)合唱団も、専門の団体から、またロンドンの Sacred Harmonic Society (宗教音楽協会) が参加し、全体として優れた強い効果をもたらした。ヘンデルの戴冠式賛歌^{ココネー・コシヨット・アンセム}、そして『サムソン』からブラブーラをリンド嬢が歌い、ハーバー Jr. がトランペットを添えた。ハイドンの『天地創造』とメンデルスゾーンの『エリア』でリンド嬢は聴衆を魅了した。彼女は『天地創造』でソプラノのパートを全て歌い、最後まで力強く歌いきった。

ここでも彼女の音域の広さとその確実な発声を賞賛し、『エリア』では作曲家の意図を忠実に再現して見せた点を感嘆している。第二部では「On mighty pens」を

歌い、その言葉のシラブルを如何に上手く発音と楽音にあわせて歌ったかを伝えている。リンド嬢の歌のすごさは、言葉の発音が明確で何を歌っているかがはっきり伝わる点にあるようである。リンドが尋常でない表現能力で、この夜の演奏会を成功に導いたことを繰り返している。

リンドはこのオラトリオを1846年エクス・ラ・シャペルのフェスティヴァルで故メンデルスゾーンの指揮で歌った。彼女の英語の発音もイギリスの歌手の手本になるほど優れていた。

この演奏会は、この後多少値段を抑えて催されたが、その収益は£700に達し、王立音楽家協会、合唱財団、女性音楽家協会、政府機関に寄贈された。これもリンドが気前よく寄付してくれたおかげであり、リンドにとっても、音楽愛好家も快く彼女の慈善行為に共鳴してくれたことを知り大変うれしい。(50行——およそ1頁の1/6)

1849年のリンド関係のイギリスにおける記事は、前半期に限られているが、オペラではなく、演奏会での活躍と、演奏会の場合はその収益を慈善事業に寄付していることに尽きるようである。さらに、2月3日のイラスト新聞の記事でも分かるように、モーツァルトのアリアでは穏やかな表現で、「成功しなかった」といっている点である。やはりモーツァルトのオペラのアリアの表現では、異論があったようで、それを批判するメディアと、リンドの行為で彼女を激賛している関係上、穏便な表現で逃げているか、無視して述べないかのどちらかのようである。良い点は詳しく分析しているのだが、問題のあった点は逆に「成功しなかった」というだけで、何処がどのように問題だったのか不明である。此処で取り上げた3紙は、穏便に処理しているようである。

12 1850年の記事とアメリカへの出発時の描写

いよいよアメリカへの演奏旅行の年である。「研究ノート」でも記したように、アメリカ行きは彼女にとってのターニングポイントになっており、重要なのであるが、その準備と、出発前の「さよなら演奏会」、および、アメリカ、特にニューヨークに着いてからの一挙手一投足を演奏会の模様とともに特派員が逐一報道しているのである。

12-1 「The Times」の記事よる P. T. バーナムの書簡

3月6日：「The Visit or Jenny Lind to America」——

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

New York Herald からの転載で、興行師 P. T. バーナムの書簡を載せている。この書簡の内容で、どのように、そして何故ジェニー・リンドがアメリカ合衆国へ行く事になったのかが分かるので、全文をここに紹介する。

—ジェニー・リンド嬢のアメリカ訪問に関して、今日この著名な声楽家とわがエイジェントが契約を交わしたことを宣言したい。リンド嬢および彼女が選んだ同伴する音楽家集団、すなわち著名な作曲家にしてピアニストのジュリアス・ベネディクト氏、著名なイタリアのバリトン歌手ジョヴァンニ・ベレッティ氏と契約したことは事実である。私の代理人は予定した報酬を上回る額を支払うことになった。私が彼らに支払う総額はかなりの額になるが、リンド嬢のみならず、ベネディクト氏およびベレッティ氏も共に、かつて彼らが得ていた額、および当時のロンドンにおける著名なタレントに支払われていた額よりも、はるかに高額な報酬を受けることになる。おそらく私はこの計画で利益をうる事はないであろうが、たとえわずかな利益さえ期待できないとしても、私はこの契約を交わしたであろう。彼女以外のいかなる人物によっても近づくことのできないような力強い声の持ち主で、しかも慈善に満ち、純粋で、善良な性格の持ち主である女性が、アメリカ合衆国を訪れたならば、どんなにか良い影響を及ぼすに違いないと思う。ジェニー・リンドは一晩£400あるいは\$2,000以下では出演しないことは明確である。マンチェスター、エジンバラ、グラスゴー、ダブリン、その他のイギリスの地方都市におけるリサイタルでも、一晩£600も取っていたことはしばしばであった。わが代理人はイギリスで、彼女に12夜£6,000あるいは\$30,000を提案したが断られた。ロシアの宮廷での大演奏会のための巨額の提供も断った。その額は通常のほとんど二倍にも達する額であった。1851年ロンドンのハイドパークで開かれることになっている万国博覧会での演奏会で歌う要請があった。一回のコンサートに£1,200ないし\$6,000を支払うという提案がなされた。またヴィクトリア女王陛下からも同じ時期にウェストミンスター大聖堂で開く大宗教音楽祭への出演を要望された。その入場料は\$25から\$100を予定していた。しかしこれも、わが代理人の提案したアメリカ訪問への要望が強く、そのために、ヴィクトリア女王の要望も断っている。リンド嬢は私の代理人が提案したものより遥かに条件の良い多くの提案があったにもかかわらず、アメリカ行きを強く願った。彼女はアメリカ合衆国、そしてその社会制度について有頂天に語り、賛美しており、イギリスでの多くの仕事を断り続けたのは、彼女に提示された金額が最大の誘引ではなく、アメリカ行きへの願望が殊のほか強かったからである。私との契約（この契約にはアメリカ合衆国およびハヴァナも含まれている）では、彼女が望めばいつでも慈善演奏会を行うことができるという権利を、彼女が強く主張している。彼女はイギリスにおけるデビュー以来、私が彼女に提示した金額全体より多くの資金を、彼女の個人の財布から貧しい人に与えてきた。大英帝国において、彼女が厚意で歌った慈善目的の演奏会の収益は予想の10倍以上の額に達した。過去8ヶ月間に彼女は本当に善意による慈善目

的のために歌っており、彼女の生まれ故郷であるストックホルムに慈善の共済組織を総額 \$350,000 で創設している。最高の芸術的能力を、苦悩と困窮の改善のために天から与えられた才能とみなし、その思想と行動とはすべて博愛に基づいている、そうした女性がアメリカを訪問することは、アメリカにとっても幸いであると確信している。彼女が訪れた国は、何処でも同じように振舞っている。私はアメリカの男女が私と一緒に心より「神のご加護を」と祝福してくれると確信している。庶民の従順なる僕、P. T. バーナム。—New York Herald.

この書簡は、リンドの人と成りを如実に語っており、金が欲しいことは彼女の受けたスウェーデンの音楽教育の遅れを是正するために音楽教育組織を故郷に設立することが大前提にある。そのためには資金を効率よく稼がねばならない。しかし自分の能力の限界も良く知っていたようである。それがアメリカ行きを強く求めた理由であろう。1851年ハイドパークで開かれた世界初の万国博覧会でのプロムナード・コンサートに出演を依頼されていたことも、この記事から分かった。パクストンが設計したクリスタルパレス（水晶宮）として知られた会場である。近代建築を象徴したエッフェル塔とともに、記録されている建物である。

書簡からも分かるように、リンドの演奏会の値段および出演料が高かったのも、目的があつてのことで、私的所有のための財蓄が目当てであつたわけではないことも明確である。

12-2 8月14日の記事

次の記事も他社の記事からの転載であるが、これはジェニー・リンドの個人的な家族のことが書かれていて、リンドの兄の一人が、イギリスで結婚した。彼はストックホルムの水夫で、妹が有名人になり経済的にも恵まれているが、妹からお恵みを頂戴する気持ちは毛頭ない。彼女は16歳のときから両親の面倒を見ていると、最大の愛を込めて語つたとある。これは [Bridgewater Times] による。

しかし後に「The Times」はこの情報は嘘であつたと書いている。

8月14日：「Mademoiselle Lind. —Liverpool, Tuesday」

—リンド嬢がアメリカへ出発する前にリヴァプールにおいて2回演奏会を開くことになっていることを報告している。「The Times」の読者はいずれそのことに気づくであろう。

金曜の晩にはフィルハーモニー・ホールで、2回目は月曜に行われ、水曜には新しい

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
アメリカの蒸気船「アトランティック」号に乗って大西洋横断の旅に出る。大西洋横断の
旅に出る人気歌手を追って大勢の旅行客が乗船した。

彼女は木曜ロンドンから急行列車で当地に来てリハーサルに参加する予定である。バー
デンで共演したベネディクト氏は、フィルハーモニー協会の委員に、先週の火曜にバー
デン市で行われた演奏会での彼女のときは最高であったと述べている。聴衆の熱狂は
限りなく、収入も£600であった。リヴァプールの演奏会の入場券は売り切れ、プレミ
アムで売られている。観衆はプレミアムで50%の利益を上げているといわれ、演奏会
の観衆はおのおの2,600名が見込まれ、著名人が遠方から来訪すると言われている。
(22行)

12-3 8月19日：「Jenny Lind in Liverpool」の記事

これは「The Times」の記者が17日に取材し記したものである。実に詳細にリ
ンドがイギリスにおいて有名になった経緯や大陸における演奏活動、またアメリカ
へ行く事になった経緯や契約などに言及しながら、ジェニー・リンドに対するジャー
ナリズムの態度や一般大衆の反応なども分析し、演奏会の状況と風景を描写して
いる。それは8頁の1行(コラム)と3分の1(91行)に及んでいる。(ちなみに1
頁は6コラムに分かれている。)リンドが初めてイギリスを訪れたときもセンセー
ションを巻き起こしたが、今回はさらにそれを上回る勢いであった。イギリス人でも
ないのに、アメリカ行きの船がイギリスから出帆するというだけで、大騒ぎしてい
るのは、他に例を見ない。以下は多少要約しながらリンドに関する部分を重視して
紹介する。

アメリカ出発前に開かれた2回の演奏会で彼女が歌う契約は、リヴァプールの音楽年
史始まって以来の快挙である。Her Majesty's Theatreでの最後の演奏会の後、ステ
ージには立たないと思われていた。ジェニー・リンドは病院での慈善演奏会で歌った後、
故郷ストックホルムで引退し、公式の演奏会は行わないといわれていた。この決断に変
更はないと考えられていたが、ベルリン、ハンブルク、ドレスデン、ハノーヴァー、リ
ューベック、その他の大陸の諸都市で慈善演奏会に出演した。ブレーメンでは貧しい音
楽家ライネッケ氏のために歌い(当時の慈善演奏会と称するものには、新人の演奏家を売り出
すための宣伝の一環として著名な演奏家が競演し、支えることのほうが多かった)、バー
デン・バーデンでは、ホルン奏者ヴィヴィエ氏の演奏会に共演し、かえって彼女のほうが魅力
を発揮した。このバーデン・バーデンからイギリスへやってきた。彼女は評論家たちか
らイギリスではもはや歌わないといわれていたので、一般の音楽ファンもそのように思
い込んでいた。

バーナム氏はアメリカでは1回の演奏会につき£200で、全部で1500回の演奏会を

開く契約をしていた。その後で、彼女はリヴァプール・フィルハーモニー協会で2回、つまり今月の16日金曜日と19日月曜日の演奏会を総額£1,000 stgで開くことに同意した。そして21日水曜日に蒸気機関船アトランティック号で出帆することになった。

「リンドのまれに見る才能、比類ない声の美しさ、極めて魅惑的な気品あるスタイルなどを否定するのは、馬鹿げている」といいながら、そうした噂は異口同音に言われていたようである。しかし彼女の個性と慈善的行為とその気前のよさは、イギリスでは衆目の認めるところであった。

やはり、彼女がイギリスに来る前に、契約違反に関して裁判沙汰があったことが、芸術的行為とは関係なく彼女の名前と結びついて懐疑的な人がいたことは確かであった。

しかしジュニー・リンドは舞台およびコンサート・ホールではまったく問題なかった。そこで、彼女が訪英するかどうかで熱狂的に議論されたが、それに対する強硬な反対派も、また穏健派も、どちらの当事者からも、彼女がHer Majesty's Theatreと契約したことは歓迎された。ちょうどこれは、フランス・オペラに関して、グルックとピッチーニの支持者による論争で熱狂的に繰り広げられた議論に匹敵する⁹⁾。確かにバン氏との契約不履行は響盪を買い、またそれが原因で名前も売れたが、それに対して彼女は誠意を持って対処し、バン氏に違約金を自ら支払うことを申し出たことで、帳消しになっているようである。

やはり、推測どおり、当時の新聞も、少なくとも裁判沙汰を新聞が書きたてたことで、「彼女は4年間その名前が維持される貴重な価値を一般大衆の中に植えつけたのである。」「The Times」は、この大衆の中に植え付けられた彼女のイリュージョンを、彼女にとっては価値ある金鉱と称している。彼女がアメリカ公演で興行師のバーナムと交わした契約は、今後どこの国においても可能なことだとしている。これがまさにアートマネージャーという職業の始まりといってよい出来事だったのである。

さてこれからリヴァプールでの彼女の存在が、騒々しい様相をもたらしたとある。それは初めて訪英した時のセンセーションをしても、大衆を扇動する熱狂には比べ物にならない。演奏会の入場券のために狂信的な価格が支払われたといわれる。そして全てを投機の対象にしたフィルハーモニー協会の委員会を批判する声が高まったとしている。

入場券の普通の値段は7s. 5s. 3s. から1ギニー、15s. 10s. 6d. に値上がりした。

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
しかし委員会に、15s. のチケットに好きなだけギニーをつぎ込んで買う権利を与えた。ジェニー・リンドを聴くために適切な値段のチケットを買って喜んでいる非常に大勢の市民が出し抜けに排除された。フィルハーモニー協会は地方紙と共に、昨年すこぶる不人気で、ここ12ヶ月に改善が行われた様子もなかった。それどころか委員会に対する不満は以前より高まっている。素晴らしい音楽ホールは、こうした夢のような期待に応じて建設されたが、すでに対立していた富裕階級と中産階級の間の競争の不幸な原因になってきた。新聞各社は中産階級に味方し、彼ら自身も自ら自尊心を傷つけていたが、自らの酷評にさらに厳しさを加えている。全体としてみれば、一般市民の側に正当性があるといわざるを得ない。新しい音楽ホールが完成して以来、フィルハーモニー協会は高圧的に、したがって排斥的に運営しており、大多数の個人に許しがたい迫害を与えている。こうした個人の心からの協力を必要としているのであり、共通の目的のために利益をもたらしたに違いないのである。そのような争いをしている間に、芸術は悩み、建築美および音響効果の良さで、ヨーロッパのどこにも引けを取らない殿堂の建設は、リヴァプールの音楽運動を前進させるというより、今までのところは傷つけてしまったといわざるを得ない。

12-4 演奏会の風景描写と批評

この後の記述は演奏会の風景描写と批評である。

まず前日の演奏会の描写で、

会場に使われたフィルハーモニー・ホールが改造されたようであるが、見たところ大して違わないようだ。しかしホールの概観は他のホールより良く整い、特に照明が均一で、光の具合が心地よい。オーケストラは地域の楽団と合唱団が使われ、素人が混ざっていた。しかし、E. W. トーマス氏がロンドンから馳せ参じてリーダーになり、全体はベネディクト氏の指揮で統率されていた。演奏会は『魔笛』の序曲で始まり、愛国賛歌『我らのヴィクトリア女王万歳』はモーツァルトの『皇帝ティトスの慈悲』から旋律を採ったものである。当時としてはリヴァプールの合唱団はイギリスの最高の合唱団を代表していたのだが、それがこのような特別公演にはそぐわなかった。(この演奏会も当時の慣例に従い独唱会ではなく、ヴァラエティーに富んだものであった。) ウィリアム嬢とベレッティ氏が『セミラミード』から2重唱を歌った。しかし3,000人の観衆は総立ちになりリンドを声援と喝采で迎えた。リンドは昨シーズンより元気そうであった。熱意に満ちた歓迎振りに動かされ、「Qui la voce」(『正教徒』)の有名なカヴァティーナの出だしの楽節を歌ったときは震えのようなものを感じさせたが、すぐに全力を投入して彼女独自のスタイルでアダージョを歌った。彼女の声は力を備え充実しており、音調の美しさを高め、高音に言葉では言い尽くせない魅力を持たせ、鳴り響く質量を備えていた。アダージョの終わりで、新しいひとつの優雅なカデンツァを、完璧なまでの素晴さで演

奏し、爆発的な喝采を受けた。カバレッタ「ヴィエンディレット」は素晴らしい技巧的な声の芸当を見せる作品である。二番目のクプレは巧妙で独特の装飾を変化させて多様性を見せ、さらに驚くべき「カデンツァ」で賞賛と喝采の渦の中で最後を飾った。この騒ぎはリンドが再び舞台に現れるまで収まらず、騒々しく手に負えない聴衆の興奮を鎮めることができるのは、リンドの優雅で魅惑的な挨拶以外になかった。演奏会の後リンドは6回舞台に現れた。一部でベレッティ氏と『イタリアのトルコ人』の「Per piacere」の二重唱を歌い、さらに『魔弾の射手』の「Und ob die wolke」の「カヴァティーナ」をA♭で歌った。二重唱でリンドはベレッティ氏の熟練した能力で支えられ、「カバレッタ」の華やかな「フィオリトゥーレ（装飾）」を豊に駆使し、オリジナルではあるが難しいもうひとつの「カヴァティーナ」で終えた。『魔弾の射手』の「カヴァティーナ」はまさに完璧であったが、ホルン、バスーン、チェロは時々調子を外し、かなりリンドの歌の素晴らしい美しさを邪魔していた。

第二部で、

ベネディクト氏が彼女のために特別に作曲したイギリスのパラード『このリュートをお取りなさい』を最初に歌った。バラードそれ自体は気取らず控えめであるが、紛れもなく宝石のように輝く一品である。英語を美しく明確に発音しており、長らくこの国から遠ざかっていたにもかかわらず、英語を軽視していなかったことを証明していた。アンコールを拒まなかったが、同じ曲を歌った。聴衆はモーツァルトのオペラ『魔笛』の夜の女王のアリアを所望し、幾度かカーテンコールで謝意を示し、引き下がろうとしたが、聴衆の要望の強さに押されて、このアリアの最も厳しい楽節を繰り返した。さらに度重なるアンコールに自らピアノに向かいスウェーデンの音楽を演奏し、さらに『羊飼いの歌』を歌った。これは山から羊の群れを呼び戻す声を#7の非常に変わった音程を真似たものであった。リンドはその呼び声の真似を完璧なまでの正確な抑揚で魅惑的な雰囲気をかもし出し、聴衆は色彩豊かな民俗歌謡に恍惚状態で聞き入っていた。この美しい歌い手は、イギリスの小説家シェリーの『ひばり』のように芳醇な彼女の旋律を歌い上げた。歌はエコーで終わるが、これはリンドの最も驚異的な特殊な効果のひとつで、ほとんど息を吸わずに弱音を発する。最後の音は中に溶け込むと、聴衆は今や美声の歌姫の呪文から解き放たれ、満足のうねりに炸裂し、再び大伽藍の壁を反響させた。その響きはリンドが再び舞台に戻ってくるまでやまなかった。すでに9回歌っていたが、さらにピアノに向かいスウェーデンの愛の歌を歌った。それはもの哀しいものであった。
(略)

……その後まだヴィヴィエ氏のホルンの演奏が続いた。彼もセンセーションを巻き起こし、二度演奏した。

彼の演奏についてもかなりの紙幅を割いて褒めている。彼にもアンコールが起きている。彼はバーデン・バーデンで演奏会を開き、リンドと競演した人物である。

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
それ以外にベレッティ, T. ウィリアム両氏とウィリアム嬢, またベネディクトの
作曲した作品の演奏, リンドがアメリカへ同伴するアンドリュース嬢の歌などが続
き, 合唱曲, オーケストラ作品など, 盛りたくさんの演奏が行われたことを紹介し
ている。メンデルスゾーンの『真夏の夜の夢』から「結婚行進曲」が演奏された。

面白いのは一部と二部の間の休憩時間に, アメリカ人が新しい楽器を紹介宣伝し
ようとしたが, 騒々しくて無駄に終わったことを報じている。

ヘンデルの『メサイア』が演奏されるので, その練習がフィルハーモニー・ホー
ルで行われている。この地域はリンドをひと目見ようと群集が押し寄せている。リ
ンドはそれまで, ハイドンの『天地創造』とメンデルスゾーンの『エリア』は歌っ
ているが, ヘンデルの『メサイア』はまだ歌っていない。すでに入場券は売り切れ
ているが, プレミアつきで再販売されている。

演奏会の聴衆に著名人がおり, その名前が挙げられている。「ウォード卿, ベン
ティンク女史, プフレンチ男爵夫人, ジョーン・ベイリー卿, ジョージ・ギボン卿,
裁判官コンウェイ師, (インドの首領が正装して参列していた)。その他の貴人およ
び近郊の郷紳階級が参列していた。客船アトランティック号の全客室は確保さ
れていると聞く。特にジェニー・リンドが船員のための慈善演奏会を甲板で行う意
思の有ることを公表したとの噂がある。

以上が8月19日のコラムの要約である。リンド以外の演奏者のことは省略した。
リヴァプールでの演奏会のアンコールで, 聴衆がリンドにモーツァルトのオペラ
『魔笛』の夜の女王のアリアを所望しており, それにリンドが応えて歌っているよ
うであるが, この歌こそ, リンドが批判の対象になっている演目なのである。それ
が此処ではそのことには何も言及されていないのであるが, 批判的なのは専門家
の間であって, 聴衆は技巧的なものを聞かせてくれれば, その解釈がどうであろうと
問題ではない, というのではないであろうか。

12-5 8月20日:「Jenny Lind at Liverpool」(from our own reporter)

Liverpool, Aug. 19 — 当社の記者による記事。リヴァプール19日

(ジェニー・リンドには常にマドモワゼールの敬称がつけられている)

王侯貴族, 高名な政治家, あるいは外国の有力者よりも, 現在のジェニー・リンドの
ほうが好奇心を持って, 一般市民から注目される人物である。熱狂的な群集が一日中,
彼女の宿泊しているアデルフィ・ホテルのドア付近にたむろし, 彼女の乗せた馬車が出

て行くのを待ち構えている。昨日彼女は、同伴する一行とニューヨーク行きの新しい蒸気汽船アトランティック号で出帆する。岸壁には大群衆が彼女の到着を待っており、さらに大勢が小型船に乗ろうと目論んでいる。小型船からアトランティック号に乗り移るらしい。ウェスト船長がリンドをアトランティック号に嬉しそうに案内した。彼女は特等船室の個室に満足しているようであった。

『メサイア』のリハーサルは土曜の晩に行われることは一般に知られていた。そのため彼女の宿泊しているホテルからフィルハーモニー・ホールまでの道程は群衆で埋まっていた。すさまじい人たちで、建物のドアまで近づくことも難しいほどであった。リハーサルは権威筋の団によって占められていた。オラトリオ全体は上手くいき、指揮者のベネディクトは最大限に効果を上げることに全力投球した。リンドはいつものように、指揮者の指示に最善の注意を払い、最初に到着し、最後に帰った。この彼女の行動は模範である。全ての芸術家がリハーサルに熱心であれば、評論家も不完全でぞんざいな演奏に不満をぶちまけることも少ないであろう。テノール役の本ソンはリハーサルに現れなかった。これはリンドに対しても失礼である。リハーサルは夜の7時に始まり、夜中の12時半まで続いた。リハーサルに同席していた人たちにリンドは非常に好意的な印象を与えていた。演奏のできは予想された。彼女の『エリア』のソプラノのパートの解釈も優れていた。ベレッティもまた期待された。彼も英語を驚くほどたくみにマスターしている。

リハーサルの最中に指揮者のベネディクトが予期せぬ賛辞を發した。またフィルハーモニー協会運営委員会の一人が、ジュール・ベネディクトに対して、感謝状を渡し、再びイギリスで指揮することを期待している。(感謝状そのものは17行で、3名の署名入りである)

この声明文(感謝状)はモロッコ皮の箱に収められていた。ジェニー・リンドに対して3回歓声が上がった。これがリハーサル風景である。リハーサルが終了して演奏者たちが帰るのもかなり難しく、誰もがリンドの虜になり喝采した。

ジェニー・リンドは信心深く教会のミサに出席するために外出したが、目指す教会に女性たちが群がっていたので、リンドはスウェーデン領事と一緒に別の教会へ裏口から出かけて、群衆は肩透かしを食った。教会では聖歌隊が賛美歌を初めとする宗教合唱曲を演奏していたが、その水準はたいしたことはなかった。

彼女の出発前に、フィルハーモニー協会の挨拶がなされた。彼女の慈善奉仕により病院に新しい病棟を付け加えたことに対する感謝の印として、華麗なお茶用湯沸ケトルが送られた。アトランティック号は水曜の朝10時に出帆することになっていたため、9時に小型船に乗ることになっていた。巷ではさまざまな噂が流されていた。アメリカに到着してからのことまで、先取りしてさまざまに段取りが作られ、入場券もオークションで売られることになっている。リンドは1ヶ月間ニューヨークに滞在し、その後他の

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
州に演奏旅行に出かけることになっている。

リンドのためにロンドンから取り寄せたと思われる美しい花束が用意されていた。それもドイツ産の葡萄の房がついたものまでであった。教会までがリンドの存在を記念して一日中鐘を鳴り響かせていた。中には彼女と握手しようとした青年が、リンドが演奏会場から馬車を出発させた時に目的を達した。しかし馬車が急に動き出したために道に投げ出され、埃と泥まみれになったが、冒険的行為が成功したことを記憶に残すために、あえて汚れを払おうとしなかった。これは 20 もある逸話のひとつに過ぎない。また女王から子犬が送られ、アメリカに連れて行く。

この記事もおおよそ 1 コラムの 4/5 に及ぶ。

12-6 8月21日:「Jenny Lind at Liverpool」(by Electric Telegraph) Aug. 20.

19日の『メサイア』の演奏会は最初の演奏会より聴衆が多く、3,000人以上が出席した。リンドの歌は予想を遥かに超えていた。「Rejoice greatly」はエネルギーで輝かしく「He shall feed his flock」の表情の豊かさ「How beautiful are thy feet!」における優しさ「I know that my Redeemer liveth」における熱烈な献身、最後のアリア「God be for us!」の素晴らしいリーディングは、新しい予期せぬ特徴を生み出し、何者にも拘束されない自由な情熱を生み出していた。2度目と4度目のアリアはアンコールされた。彼女のヴォカリーゼは素晴らしく、またレシタチーヴォでは英語の発音も文節が明確で、全員が感激して賞賛を惜しまなかった。ベレッティもヘンデルの音楽でかなり高い評価を得て「Why do the nation」で大きな効果と成功を生み出した。彼の英語も非常に良かった。合唱も良かったがオーケストラに問題があった。他の歌い手も良かった。オラトリオの後で国歌が歌われた。ジェニー・リンドは二つの国歌に関わっていたが、そのことについてはここでは触れないでおく。建物の壁は歓喜で反響した。帽子、杖、ハンカチがいたるところで波打っていた。オーケストラの舞台は花束と花輪で覆われ、その多くは歌姫の頭上と肩に落ちてきた。これはジェニー・リンド自身、これまでの芸術生活のうえて経験したことのないようなサヨナラ公演であった。

『メサイア』の休憩時間中にフィルハーモニー協会の委員会から彼女の人格と才能を褒め称え、幸せな旅と速やかな帰還を望んでいるというメッセージが送られた。このメッセージは上質の皮紙に書かれ、リヴァプールの腕とスウェーデンの腕が描かれていた。ベネディクトには端麗な黄金の携帯用かぎ煙草入れが贈られた。

21日の朝、ジェニー・リンドは病院を訪れ、前述した銀製のお茶沸かしと素晴らしい銀の蜀台が運営委員会から贈られた。多くのファンが彼女をアトランティック号まで護衛するために蒸気船を雇った。5時半には船は出帆する。彼女の同伴者はベネディク

ト、ベレッティ、親戚のヘルネンセン嬢、彼女の秘書ヒセルツベウルイ氏、そしてウィルソン（バーナムの周旋人）である。

午後8時、警察署長からジェニー・リンド宛にメッセージが送られた。それは、彼女の出発を見ようとするファンが岸壁に群がってくるので、現場の危険性をかんがみ、予想される事件と死傷者をなくすために彼女に、2時間早く^{いしげ}船の蒸気船を出帆させたいという。そのためリンドは密かに8時15分前にアデルフィ・ホテルを出た。そのために彼女をひと目見ようとする群集はだまされたことになる。多くの人は明日の「The Times」の朝刊を読み、彼らの失望の報告を読んで驚くことであろう。(60行)

この後の記事には、Her Majesty's Theatre での『ノルマ』や『夢遊病の乙女』の上演と新しい Prima Donna の紹介や、当時有名なオペラ歌手のゾンタクの出演に関する記事がある。上記の記事は前年度に Exeter Hall で行われたヘンデルの『メサイア』の演奏会とほとんど変わらない評価である。

12-7 8月22日(木):「Jenny Lind at Liverpool」(from our own Reporter)
—Liverpool, Aug. 21 (凡そ1コラム半)

リヴァプール8月21日。船の出帆する岸壁での情景は次のように描写されている。

昨日の記事どおり、ジェニー・リンド嬢は今朝8時15分前にアデルフィ・ホテルを出立した。天気は曇り雨模様。出帆時間の変更を知ったおよそ100名が、すでに来ていた。雨に濡れ、震えているが、好奇心旺盛な人たちであった。リンドはすぐには乗船せず、ベネディクト、ベレッティ、ヴィヴィエの諸氏、および幾人かの親しい友人を伴っていた。10時少し前に天気が良くなり太陽が照り始めた。ほんの短い時間だが、どよめきと騒動が起こった。人々は町の隅々から馬車や徒歩でやってきた。3つの異なったドックの曲がりくねった隙間は、短時間だが群集により埋め尽くされた。「スウェーデンのナイチンゲール」はすでに2時間も前に船の蒸気船に乗り出帆してしまっていることを知ったら群集の落胆はいかかなものか想像がつく。しかしアトランティック号はできる限り岸壁に近づいていたことは、せめてもの慰めであった。そうこうするうちに、水の表面はジェニー・リンド嬢に最後の別れを告げようとやってきた、にわか乗客で一杯の大小さまざまな蒸気船、ボート、クラフトにより覆われた。岸の両側は見物人で埋めつくされ、目撃するためにリヴァプールにやってきただけでも値打ちがあった、と思う見世物を自ら形成していた。

10時半に公式の手続きが終わり、リンド嬢の友人たちに岸壁に戻るように伝えられた。鉄砲の合図と船の横腹から出る煙は陽光に当たって輝き、アトランティック号が正

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
式に出帆することがアナウンスされた。巨大な蒸気船は堂々たる調子で河を下り、平行して運航するさまざまなボートと行きかしながら活気の怒濤が連続的に響き渡るのが聞こえた。プリンセス・ピアの近くに到着すると直ちに地上の群集の一団と蒸気船の大群集が集まった。アトランティック号から挨拶の大砲を2度撃つと、湾の片方の岸から断続的に答えが返ってきた。地上と水面の両方から上ってくる大きく断続的な歓喜の叫びは、船上の乗船客により繰り返された。素晴らしい快晴——今や、太陽は全ての栄光の中に輝いているかのようだ——ヴォリュームいっぱいの煙は空高く雲間に消えるまで、回転式の柱のある蒸気船の脇腹で渦巻きが上がる。ドックにはあらゆる形態の軍艦が停泊し、あれこれの物体と結合して、その堂々たる、変化に富んだ、活気に満ちた情景は今までに見たことのないような風景を産み出していた。汽船の外輪箱の近くで、ウェスト船長の脇に立ち、白いハンカチを腕が痛くなるまで振っているのが目撃されると、興奮が倍増された。歓喜の声が途切れ途切れ聞こえてくる。暗く遠くの塊から特定のものを識別できなくなり、群集が拡散し始めるまで続いた。

出帆する波止場の情景を描写した後、ジェニー・リンドの芸術的才能とパーソナリティ、そして他の歌手との違いについて、次のように分析している。

この尋常でない賞賛の仕方はジェニー・リンドの経歴を象徴しており、ほとんど偶像崇拜にまで達していた。彼女が初めてイギリスに来て以来、この最後の出現でクライマックスに達した。それは彼女の声楽家としてのこの上ない天賦の才によるのみならず、アイドル崇拜であることは、少なくともこの瞬間は疑う余地はない。芸術史に言及された歌い手で、かくも名誉を与えられ、称揚された歌い手はこれまで居なかった。またかくも高額報酬を得た歌手も居なかった。しかし声楽芸術において、たとえ彼女に勝るとも劣らず、ジェニー・リンドと同等の存在だった声楽家が活躍していたことも否定できない。公人としてのジェニー・リンドに関してのみいえば、他の観点から、どの前任者とも、また同時代人とも遥かに異なるものがある。それは彼女ほど慈善事業に貢献した人物はいないということである。他のだれも彼女ほど絶えず寛大に気前よく振舞った人物は居ない。(下線筆者) 信頼できる権威筋から聞くと、彼女が過去6年間に演奏で稼いだ額は、巨額だったにもかかわらず、ジェニー・リンド自身は、個人的消費のためには年間£1,200で十分だと述べているそうである。年間£1,200でもかなりの額といえるかもしれないが、簡単に、しかも厳格な礼儀作法によって、数千ポンドを自分のために確保できる人物が、他人のためにかくも巨額を犠牲にしていることは、賞賛しかねる利己愛とはほど遠いことを示している。この点で、ジェニー・リンドは1つの現象をあらわしている。彼女の非凡なまでの自由さは歌手としての偉大な能力と関係している。彼女の道徳的にして芸術的資質は、彼女の名前に同等の光沢を与え、大群衆が痴癡を起こし、あるいは混乱したとしても当然かもしれない。この点から見て、ド

イツとイギリスの両国で、彼女に湯水のごとく注がれた名誉は、驚くに当たらない。——この点は彼女のリヴァプールでの告別に、皇族の出立を記念する華麗な行列式典と同じくらい大勢が参列したが、それほど信じがたいものでもなく、また途方もなくばかげてもいないように見える。

以上が、「The Times」のリンドとの別れの風景を描写した記事の全容である。この記事で、何故リンドがアイドル歌手になり、またスーパースターとしての人気をほしいままに出来たかがわかる。この記事でリンドの人格と、人気の根拠を正確に分析している。彼女は確かに高額を稼いだが、それを私利私欲のために使ったのではなく、必要な人たちのために使った人柄を称えている。つまり彼女ほど自己犠牲をものともせず慈善事業に貢献した人物はいないということである。

下線部は筆者が強調したかった部分で、すでに言及されていたとおりであり、彼女の特異性と人格を称えたもので、これこそ彼女の人気の秘訣だったのである。

12-7-1 同日の岸壁での別れの風景以外の記事

ジュニー・リンドがリヴァプールからアメリカに出国する際に、リヴァプール・フィルハーモニー協会運営委員会はリンドに対し、以下のような告別の言葉を贈っている。それはリンドが出国するのは一時的なもので、再び帰ってくることを期待しているのである。彼女の才能により熱狂的なセンセーションを起こし、心からの親切と深い印象を残してくれたことに対する、感謝の言葉であると同時に、健康には十分留意し、再訪を期待する、というものである。

27行からなる議長、副議長、名誉秘書による1850年8月19日付きの署名入りの声明文である。その趣旨は

フィルハーモニー・ホールの捕落として、彼女の力強い援助を受けたにもかかわらず、またの機会を逸したことはきわめて残念至極であり、長いこと彼女の存在によって名誉を与えられたことはきわめて満足である。リンドにとっても素晴らしい思い出になるに違いない。アトランティック号に乗船のあいだも、当ホールで響いたヨーロッパにおける最後の調べは、美しさと運営の両面において、今のところは、匹敵するものがない。

そして音楽愛好家たちは、彼らによって運営される組織フィルハーモニー協会のために、金銭上の犠牲を背負い、如何なる利益も受けずに将来の責任を背負っている人たちである。しかし、自分たちの厚意により科学を奨励し、最高の音楽作品を開拓するように計画している。この協会のために、その作品においてユニーク、その目的において私利私欲がなく、彼女が最後の演奏会を行ったこの機会に、リンドの親切に対し、当委員

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

会の感謝の気持ちを表すとともに、アメリカにおける更なる進歩にたいして、暖かい関心が得られ、そして同じように成功すると確信している。当協会は彼女が出立することを目撃することの苦しみと同じく、リンド嬢が再びイギリスに帰られることを歓迎する喜びを、最初に与えてくださることを願い、彼女の出立を認める。イギリスこそ、彼女をかくも高く褒め称え、尊敬する国なのである。

以上のような書類が会長、副会長、名誉秘書の連盟で 1850 年 8 月 19 日リヴァプール、付で出されている。

さらにこの記述の後に以下のような演奏についてではない、彼女の慈善行為についての記事が記されている。

12-7-2 彼女の慈善行為についての記述

リヴァプール・フィルハーモニー・ホールおよびフィルハーモニー協会を良いホール、良い組織として自慢しているが、委員会として、会員の紳士たちが自ら貢献度を宣伝することを批判している。さらに Southern and Toxteth Hospital から贈与された銀製のお茶用湯沸ケトルについて、如何なるものか詳しく説明している。この贈物はスウェーデン領事が彼女の帰還まで預かることになった。リンドは病院を去る前に同じ国の船長が入院していることを知り、葡萄を土産に見舞っている。そして訪問者の記帳として、病院のもてなしに感謝する由署名し、「そして何時の日か、この美しい病院に対して再び何かのお役に立つことが出来ればこの上なき幸いです」と書き加えた。この言葉は病院に対する誠意が伝わるものとして、また英語の表現を褒めている。

ここまでで 8 月 22 日の記事の半分を費やしている。

12-7-3 ヘンデルのオラトリオ『メサイア』の演奏会

そして最後にヘンデルのオラトリオ『メサイア』の演奏会の模様が報告されている。かなり長い引用する。

この演奏はリンドの評価を高めた。これ以上望むものはない。トランペットのように明確な声で地方都市の巨大な建物の全体を満たした。これほど強調した純粋な形でレントチャーヴォを今まで聴いたことがない。アリア「Rejoice greatly」は変化にとんだ「ブラブーラ」である。それは意味のない^{フィニッシュ}装飾楽句の羅列ではなく、旋律の送りであり、その中に表現されているテキストの勝ち誇った感情は、インスピレーションから湧き出る力で表現されている。この歌の琢磨された節は、最大限の柔軟性を求める。一方、そ

の独特の声の特徴は、高音を自由に使いこなせる能力と結合して、力強くしかも輝かしい声によってのみ表現される。このような身体的な資質はリンダの独特の天賦の才能であり、また彼女の周知のテキストに対する知性と尊重が加わり、さらにもっとも繊細な努力により、身に着けたものである。上品な声の抑揚により作り出される表現の印象は、深淵であると同時に普遍的で、最も高揚した宗教的感情を群衆の心にもたすのに、音楽が適していることを理屈ぬきで証拠立てるものである。最高の精神を備えた芸術家にとって、こうした成功は劇場での大喝采の騒々しい騒ぎも価値があるに違いない。演奏者も聴衆も、芸術が我々に共通した本性の最も高揚した感情の雄弁な代弁者になるとき、我々も芸術家も共に平等に報われる。この単純な努力で、リンダは鑑賞能力のあるものなら誰でもなせると言う確信を持ち、同じ程度に実行力と精神力を酷使して音楽様式を完全に管理できる女性として、自分を確立した。純粹者であり眞実主義者であるがゆえに急進派といえる。「Rejoice greatly」がブラブーラの最高の実例である限り、可愛らしいアリア「He shall feed His flock」の表現は、彼女の表現に対して批判的な立場をとる人たちが求めるものと変わらぬ洗練さを示している。ここには力強さも輝きも求められていない。それどころか、音楽の内的で遠慮がちな美しさから効果を引き出す単純さが求められている。響きという手段により、感情を最も熟練して描ける画家は、二つの異なった思考様態を、それぞれ適切に描写できるであろう。そして同等の成功率で実践するためには、完全に完成された芸術家、つまり単なる声楽家であるだけでなく音楽家でもあることを求められる。ジュニー・リンダはその両方を兼ね備えており、それまでに経験した他の如何なる機会よりも、おそらくより顕著にそれを示したのである。この神聖なパストラルにヘンデルが付けた神聖な旋律は、泉から湧き出る軟水のごとく彼女の唇から流れ落ちる。彼女の言葉の朗読は完璧であり、聴く耳に充足感を与える sotto voce (弱音) を抑えた力で行われる。「Rejoice greatly」でリンダが1, 2箇所わずかに変えた。そして辛うじて音楽を保ちながらカデンツァを付け加えたことを、ここに明記すべきであろう。しかし「He shall feed His flock」ではそのような改変は見られなかった。我々としては宗教的オラトリオでの大喝采とアンコールには反対であるが、この歌の後で聴衆が大声で意思表示するのに、唱和せずにはいられず、繰り返すことを悲しむわけにはいかなかった。リンダが遥か彼方の国へ旅発ってしまうことによって、それだけ彼女の歌声を聞くことから離れてしまうわけで、再び聞けるチャンスが何時になるかが最大の問題になった。「How beautiful are the feet」では、それほど良くはなかった。しかしそれは多分に、フルートのオブリガートを演奏した素人の紳士のせいであった。テンポと調子についての理念がリンダと明らかに違っていた。

「I know that my Redeemer liveth」は再び完璧であった。要するに我々はこの素晴らしい献身的な旋律の作品を適切に演奏されるのを聴くのは初めてなのだ、といっても過言ではない。リンダが「For now is Christ risen from the dead」の言葉に与

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

えるマナーには、何か積極的なインスピレーションを与えるものがあつた。最終楽章もまた——厳格にテキストに従い、ピクともせず終結に持っていく——教義を教える崇拜の感情を持たずに、このような音楽に接して感情を動かされることは、音楽をスポイルすることであると言う人も居るかもしれないが、この歌手の芸術は全て、歌手がなしたであろうよりも遥かに効果的であつた。最後のアリア「God be for us」もまた同じくらいそれなりに素晴らしいものであつた。『メサイア』には『エリア』における「Holy, holy Lord God of Sabaoth」のような特徴はない。『エリア』にはオーケストラと合唱の統一された雷鳴のような響きの上を行く、ソプラノを高める声の強さと質により創り出される圧倒的な効果があるが、他方情熱と変化に乏しい。これらのアリアには表現の深さと崇高さがある。全体として新しい光の中にリンドの才能が展示され、彼女の才能を普遍的なものとして確立している。

ジェニー・リンドに対して£1,000 を含む全ての費用が払われた後、2回の演奏会の収益は、理解する限り、£1,700 を超えた。

以上の『メサイア』の演奏に関する評論に、1コラムのおよそ半分のスペースが費やされている。「The Times」がヘンドルのオラトリオ『メサイア』の批評を記載するのは初めてで、1848年のロンドンの Exeter Hall における演奏会の批評はなかった。これはかなり称賛している内容である。筆者としては、『エリア』と『メサイア』のソプラノ・パートの比較の部分は、いささか疑問もないわけではないが、この記事は署名記事ではないので、なんともいえない。これまでの演奏評を読んで分かったことの1つは、リンドがオペラのアリアに限らず、オラトリオのソロのパートにおいてもカデンツァで即興的装飾をつけていたようだという点である。当時としては認められていたやり方であつたのであろうか。それはバロック様式の習慣であるとともに、19世紀のヴィルトルオーソの聴かせどころといえよう。

これに対する「The Illustrated London News」の記事は、イラストを載せているので記事自体は、「The Times」に比べれば遥かに短い。次はそのイラスト新聞の記事である。

12-8 1850年8月24日:「The Illustrated London News」——「Jenny Lind Departure for America」——自社記者の報告——リヴァプール発。水曜の夜。(p. 171)

上記のような見出しで1頁の約1/6が記事で、次の172頁の半分にリヴァプール港出発の様子イラストが掲載されている。(図2)

記事は「ジェニー・リンドは去った。大成功の最中に行ってしまった」で始まる。「The Times」と同じく詳細に情景を描写しているので繰り返さないが、比較してその表現が異なる点を探ってみようと思う。

彼女の成功は専門とする芸術表現に起因する。アメリカでも大喝采と大歓迎が待ち受けていることは間違いない。ここではヨーロッパのファンが彼女の出発を見送りに来ていた。できるだけ新鮮な気持ちで、ここに集まった公衆の感情および共感を上手く表現したいと思うが、詳細には表現できないと思う。見送りの大砲の高音響およびマーシー河の両岸に集まっていた数千に及ぶ大衆の叫びに耳が遠くなりそうである。無数の船舶が河面に漂い、彼方此方に照らされ日差しに輝いて目がくらむほど眩く、アトランティック号の航跡を追っていたので、この異常な光景を描写することなど出来そうもなかった。

以下凄い人出のため、警察としても整理がし難いことを予想して、リンドの出発を早めたことが述べられている。「警察はジェニー・リンドの影響力の大きさを考慮して、出発の時間を繰り上げ、さらに裏道を通り、それを公表しないように計らった。それはジェニー・リンドの足（出発）と生命の危険を避けるためである」という点では、「The Times」と同じである。それは上手く行ったが、「それでも待ち受けていた一部のマナーの悪い連中に邪魔された。このような超有名人に対して、イギリス人は何時になったら対処の仕方を学ぶのであろうか」と記している点が異なる。

……海岸から礼砲が放たれ、アトランティック号から返答がなされた。あらゆる種類の船舶が漂い、旗がはためき、叫び声と大砲の轟き、それに太陽の輝きが、一体となった全景を我々は目撃したが、これは尋常な光景ではなかった……

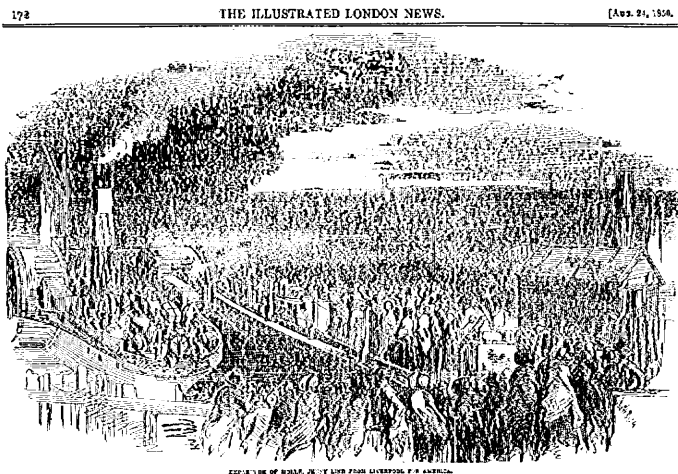


図2 「ジェニー・リンド嬢リヴァプールよりアメリカに向けて出発」

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
ことを描写した後「こうした情景の後にコンサートの説明は興ざめであろう」とい
って、彼女の最後の演奏会と、彼女にまつわる逸話を紹介している。やはり、文字
による説明も「The Times」より簡単である。前述したように「The Times」と
記事の内容が重複するが、表現が異なり、描写が細かい。むしろ「The Times」
の方が長すぎるのかもしれない。

金曜日の演奏会は特に書くこともない。ロンドンでの演奏会の繰り返しである。全て
の関心はリンドに集中した。なんという受け止め方か！ 観衆はスタンディング・オベ
イションで迎えた。リヴァプールの人々にこの様な情熱とハートを持っているのは想像
もつかなかったであろう。もし彼らがリンドを食べられたら、食べていたかもしれない
ほど狂喜していた。彼女の最高の歌は『魔笛』からの「Ah non paventur」であった。
『魔弾の射手』のアガーテのカヴァティエーナが次なる関心ごとであった。これは私が依
然何処の国でも聴いたことのないものであった。彼女はスウェーデンの歌で締め括った。
これは聴衆を抱腹絶倒させ、爽快で実に愉快地歌った。

月曜日の演奏会での『メサイア』の彼女の歌唱は、彼女がヘンデルの歌をいかに歌う
かを聞くよい機会であり、アマチュア音楽愛好家にとって最大の喜びであることを証明
した。天才はスタイルに拘束されない。物事の核心にまっしぐらに直進する。そしてヘ
ンデルの重厚で単純な旋律に親しみを感じる。それはちょうど、メンデルスゾーンの想
像的な精神に満ちた旋律に親しんでいるのと同じようである。リンド自身の宗教的感情
はヘンデルの音楽と共にある。したがって、彼女が全身全霊を傾けて表現していること
は疑う余地がない。これは批判すべきものではない。記録するだけで十分である。芸術
的観点から見ても彼女は完全に成功したが、(「I know that my Redeemer liveth」
を繰り返し歌ったあと) 歌わないときにも目で表現しており、最後には花束攻めにあつ
た。あらゆる形に花束が積み重ねられ、オーケストラから離れることがほとんど出来な
いほどであった。1つの花束が彼女の前に置かれたので、彼女が感謝の印にお辞儀を繰
り返したら、肩に花のレイがかけられ、傍らにいた紳士がそのレイを外した。幸運な紳
士はそのレイを誇りにして保管した。

勿論、ジェニー・リンドと彼女の行動以外に、話題はなく、また誰も考えようとし
なかった。彼女は教会に行くか、サザン・ホスピタルへ行く時を除き、アデルフィ・ホ
テルの部屋に籠り、外出しなかった。病院からは銀のお茶用湯沸ケトルと2つの燭台が
贈られた。そのお返しに建物の横で歌を歌った。彼女の私的な楽しみに我々が参入す
る権利はなかった。彼女は勿論数限りない贈り物を受け取った。なかでも非常に美しかつ
たのは花模様の建物の形をしたもので、それに葡萄の房がぶる下がり、それを限られた
親しい友人たちに摘ませていた。そしてフィルハーモニー協会から贈られた言葉を受けた。

同じ情景、同じ演奏会についての記述でも、「The Times」は長く詳しいが、イ

ラスト新聞は簡単で分かり易く、逸話的なものが目立つ。病院からの贈り物について「The Times」でも触れているが、此处ではそのお返しに歌を歌ったことを記している。フィルハーモニー協会からの名誉証は贈与されたことにだけ触れ内容には触れていないが、「The Times」は全文を記載している。

ここでもリンドの『メサイア』の解釈が他の人たちと異なる独特なものであったようで、それに対して批判点もあるようだが、無視しているようでもある。それはやはり、リンドを批判する雰囲気ではなかったということであろうか。

「The Times」ですでに述べていたように、彼女の兄についての話は純粋な作り話である。——地方新聞の悪筆家の馬鹿げた悪意に満ちたでっち上げであったと記している。

12-9 8月26日：「The Times」の記事。

「The Jenny Lind Concerts at Liverpool」——

フィルハーモニー協会が収益を上げているにもかかわらず、それに言及していない「The Times」の記者とフィルハーモニー協会の秘書サドゥロウ氏とのやり取りがあり、終わりに、『メサイア』のリハーサルに参加しなかったテノールのベンソンが欠席理由を述べている。ロンドンの大聖堂で日曜に契約しており、加えてリハーサルが土曜ではなく月曜であれば、ジェニー・リンドに敬意を表して夜を徹して馳せ参じたであろう。オラトリオの演奏はできるだけ完全に、しかも満足のいくものであるべきだというのが、彼の願望であった。(17行)

同じ頁の隣のコラムに「Royal Italian Opera」の見出しで、グリシ出演の記事が20行書かれている。

13 アメリカにおけるジェニー・リンドに関する記事。

アメリカに遠征する過程と、アメリカでの活躍についてはアメリカ人の研究に基づき、かなり詳しく触れたので、その実情をイギリスのメディア、つまり当時の新聞がどのように報じたかを中心に纏めてみた。

アメリカに遠征してからの記事は「The Illustrated London News」の方が早い、いずれも現地他紙の転載である。

13-1 1850年9月21日：「The Illustrated London News」の記事 (p. 247)

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたか

「Enthusiastic Reception of Jenny Lind」——アメリカにおけるジュニー・リンドの熱烈歓迎振りはリヴァプールでの出帆を遥かに超えている。今月1日の日曜日にアトランティック蒸気汽船で到着した。その様子を「The New York Tribune」から引用している。この箇所の内容は演奏会の模様ではなく、埠頭での歓迎振りと宿泊先のホテル周辺での騒ぎを描写したものである。

上部甲板の前方のハッチに直立して、その日の興奮の主役が立っていた。——それは紛れもなくジュニー・リンドである。あたかも海が通常の不快感を彼女から取り除いてくれたかのように、新鮮でばら色である。そして彼女は新しく見聞きする全てのものを、興奮して明らかに無意識に興味を持ち楽しんでいる。彼女の傍らには、著名な作曲家ジュール・ベネディクト氏と、彼女の芸術上の同伴者で、著名なバス歌手ジョヴァンニ・ベレッティ氏とが立っている。今回はバーナム氏がタラップを駆け上がり、白いチョッキの胸元に注意深く抱えた選りすぐりの花束を抱えていた。そして前へ進み、ウェスト船長により紹介された。しかしコリンズ氏は一度しのび足で近づき、あらかじめ船に乗り込み、リンド嬢にバーナム氏の3倍の大きさの花束を差し出した。

〈強大な群集は〉棧橋に横付けになっている船の近くに近づくことが制限されており、およそ50人がその内部に入ることが出来た。バーナム氏の馬車は美しい鹿毛の馬に引かれており、舷門の足元にすでに到着していた。門の内部にはすでに常緑葉と花で出来た勝利のアーチが沢山出来ていた。水面近くに立つ最初のアーチには〈ジュニー・リンド歓迎〉という標語が書かれていた。その後、中央にアメリカの鷲が描かれたもう1つのアーチには〈ジュニー・リンド、ようこそアメリカに〉と大きな文字で書かれた張幕が架かっていた。船から入口の下にはアメリカの国旗が他の万国旗と共に飾られていた。この美しい飾りはバーナム氏のアメリカン・ミュージアムの随員(3名の名前が挙がっている)の指導で設置された。大勢の博物館の人たちが岸壁におり、その大部分は花束を持っていた。こうした人々から判断すると、海岸の群集は窒息しそうなくらい密集しており、5、6人が波止場に押し出されてもがいていたが、何とか怪我人もなく助けられ、多くの人は何時間も地上で待っていた。

ウェスト船長がリンド嬢を舷門に案内すると直ぐにラッシュが始まった。ベネディクト氏およびベレッティ氏とヘルネンセン嬢がそれに続き、4名全員が馬車に乗り、バーナム氏が馬車の御者の席に乗った。ゲイトの内部にいた群集は直ちに馬車を囲み、車にぴったりくっつき、窓に群がり、我々が今まで見たこともない熱狂ぶりで沸きかえっていた。その光景は楽しいものであった。外の大衆はゲイトの方に押し寄せ始め、無理に中に入ろうとするのを止めるために、急遽入口の門を外した。しかし、豪雨が炸裂すると、1つのゲイトで、ものすごいエネルギーで前進してくる人の波を制止しきれず、別のゲイトの半分は、人並みの圧力に葦笛のように板材が弾け、群衆が流れ込んできた。あらゆる階級の人々がフロアに無理やり押し出され、その背後から崩れ落ち、生命の

危険を伴いかねないほどに重なり崩れ落ちた。見物はほとんど危険をはらんでいた。4, 50人が容赦のない群衆によって崩れ、手を広げて助けを求めた。こうした悲劇的な出来事の最中に、我々は大衆の下敷きになってもがき、息も出来ないくらいなのに、帽子が壊れるのを防ごうと腕いっぱいには伸ばして帽子を手に持ち、もがく男性の姿に笑いをこらえることが出来ないくらいであった。ついに一部の警官と紳士が彼に近づき、群衆を引き下がらせ、苦しんでいる人を助けることに、やっとの事で成功した。多くは傷を負い、鼻血を出すものあり、12才前後の少年がかなりの重症を負った。もしラッシュを適切に抑えられなければ、多くの生命が失われたであろう。

「New York Herald」から日曜の午後、ニューヨークの住民は非常に興奮し、教会へ行った。その後、特別版を発行せざるを得なかったが、それは先例を見ないほど売り上げた。彼女のために用意していたアパート、アーヴィング・ハウスに到着した様子は、「Tribune」で報道された。

彼女のアーヴィング・ハウスへの到着は、道路で出会ったと同じくらいの興奮状態を生じた。少しでも彼女をひと目みよう和家人に530人が集まった。彼女のアパートに通じる通路には全て、群衆が集まっていた。スウェーデンとノルウェーの大きな旗は、彼女がアーヴィング・ハウスに着くと直ぐに、旗棒に掲げられた。夕暮れ後も群衆はホテルの周辺に集まり続けた。そして群衆の絶え間ない呼びかけに、窓辺に2度も姿を現さざるを得なかった。最後にその日の興奮状態にすっかり疲労困憊していたリンド嬢は、身を退き、彼女のスウェーデンの従者が魔物を排除するように見張り続けた。ニューヨークの音楽財団Musical Fund Societyに属している音楽家たちが、真夜中に、この美しい声楽家のためにセレナーデを奏でた。『ヘイル・コロンビア』と『ヤンキー・ドゥードル』から、主だった旋律が多く演奏され、中でもジェニー・リンドは後者が気に入ったのか、アンコールした。

月曜には800人のアメリカの女性がスウェーデンのナイチンゲールに敬意を表しに訪れた。バーナム氏はこの貴重な情景を彼女に伝えるために付き添っていた。この後、我々はG. G. G. ホーランド師と共に、ハドソン河のフィッシュ・ヒルに数日過したいと申し出た時も驚かなかった。彼女の演奏会を始める時間は未だ決定していなかった。入場券はオークションで売られることになっている。

旅行中にジェニー・リンドとベネディクトおよびベレッティは船員と消防士のために演奏した売り上げは£64に達したと言われる。(この£64と言う数字は他の資料とは異なる。)³⁾この9月21日の「New York Tribune」からの転載記事は1頁の1/6にあたる。

13-2 1850年 Vol. 19 (7~12月): 「Punch」のアメリカでのリンドの記事
「Jenny Lind and The Americans from our own Reporters」(p. 145~149)

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

「ジェニー・リンドとアメリカ人」
半頁のイラスト。(図3)

Coronation of Jenny—The First
Queen of The Americans 「アメリ
カの最初の女王, ジェニーの戴冠」

大西洋を横断しようとするジェニー・リンドが乗り合わせた船が分かった瞬間、報告者と特派員の有能な一団を乗船させるべく派遣した。彼らは、ナイチンゲールのあらゆる瞬間を監視するために、船に様々に変装させて乗船させていた。……美しい歌う鳥がひらひらと飛び交い、それはあたかも彼女が蒸気船のパドルボックスから、次のパドルボックスへと、風も波もものともせず、ホップしていたかのように思われた。……

誤解されていたことなのだが、ジェニー・リンド嬢は同伴者とデッキの上部の船室から白いハンカチを振って、リヴァプールを離れるところを見送られた。そして同じハンカチを同じデッキの上部の船室からアメリカの港に入港するのを目撃された。——これは間違いであったというが、彼女の出帆から到着の瞬間まで、つまりジェニー・リンドの旅の始まりから終わりまで、彼女の立ち居振る舞いは何かにつけ報道され、絶えず利用された。我々は最高の権威に基づき、公衆に自信を与える事が出来る。……

旅行に費やされた時間は非常に快適であった。毎晩、船員の慈善のための演奏会を含めて、誰かの慈善のために演奏会を行っていた。我々は天候の荒れ狂う状態のため幾分邪魔された。……(略)……時には風が協和し、ボレアース(北風)の弦楽器が船の装具のロープを弦に仕立てて恐ろしげに音を奏でている。そしてあらゆる瞬間あらゆるものが、上昇音階をすごい速さで駆け上り、またいきなり下がり始めることで急に調子が落ちた。

長旅は安全に行われており、我々はアメリカへ行進している。しかし同時代人はこの地上に確りと足を下ろしており、——そしてそれ自体のコラムは——何か言う余地はほとんど残されていない。

蒸気汽船が到着する前の数日間、ニューヨークは極めて張り詰めた興奮状態にあった。したがって、現実には船が港に見え始めると、一定水準の範囲内で群衆の熱狂を保つことが警察の唯一のやり方であり、出来る範囲内で、群衆の叫びをチェックすることが警察の仕事であった。数百万人が自惚れ、数百人の頭がおかしくなり、何も役に立たなかった；警察官が辛うじて人々を樽板で救い出したにもかかわらず、棧橋は集っていた人の群れで行き詰まっていた。船が港に入ると、ナイチンゲールは上甲板の船室の現れ、べ



図3 「ジェニー・リンドとアメリカ人」 「アメリカの最初の女王, ジェニーの戴冠」

ネディクト氏とベレッティ氏に両脇を支えられて立った。ジェニー・リンドに投機したショウマンの興行師バーナム氏は、小人のサムやそのほかの人気アイドルですでお馴染みであるが、コリンズ氏——おそらくライヴァルのショウマン——と一緒に棧橋に沿って走っていた。(この後はリンドに花束を渡すために競い合ったことが描かれている)……略……

どちらか良い方をとるか、エネルギーなコリンズ氏と死に物狂いのバーナムのどちらからも逃れるか、「ジェニー・リンドは左舷の外輪の方に移動し、アメリカの旗を眺め、ナイチンゲールは——疑いなく、茶目っ気たっぷりのユーモアのセンスで、学んでいた奴隷貿易について思い出し、「有色人種」新聞の編集者、フレデリック・ダグラス氏の処置で——声を上げて主張した。「There is the beautiful standard of freedom, the oppressed of all nations worship it.」

船が棧橋に近づくとき全てのマストが目、鼻、口から出来ているように思えた。全ての窓は大勢の頭の塊で、家々の屋根は人間のスレートで葺かれているかのように見えた。そして煙突の通風管には男女の群れに見えた。ナイチンゲールはヤンキーの群集の見物人に驚いたので、彼女は「何処に貧しい人は居るの？」とたずねた。——勿論もし貧しい人がいたら、直ちに彼らのために外輪箱の上から歌ったであろう。——彼らの慈善のために。

まもなくジェニー・リンドが上陸する時がやってきた。棧橋の門にはバーナムの馬車が準備されていた。この国にショウマンの馬車が近づく音を聞いたとき、人々の心は当然、公衆が軽馬車に向かい見境なく「近寄る」ことができるように招待されると思われたが、バーナムが「ナイチンゲール」を迎えるために用意した馬車は、彼が経営する博物館を宣伝するような仕方、馬が装備されていた。馬の装備自体は上手く機能を果たし、また俗人の目を捉えているようではあるが、高尚な人たちは「馬の正装」は「不愉快」であると感じざるを得ないであろう。ナイチンゲールはバーナムの助けを借りて馬車に乗り込み、バーナムはボックスに登り、従者にアーヴィング・ハウスへ回り道をして行くように命じた。彼と御者はルートを心得ていたようである。アーヴィング・ハウスへの行程は驚くべき群集の波であり、この有様を形容できるとすれば、それは自然発生的に動き出した非常に熟成したチーズを緻密に詰め込んだ箱のようであった。

「The Times」はこの行進の概要をほとんど3コラムのトップ記事にしており、シンシナチからやってきたバーナム夫人と娘の電報を含め、司祭と牧師の一群、「おしゃれな」淑女の群れ、おそらくジェニー・リンドがデザートとして食べたであろう「全く等しい桃」の核の恐ろしい争奪戦、……しかしながら、我々は幾分驚くべき性格の電報による配信を受けたいと期待しているが、以下の「アメリカの最新のニュース」は共和国の崩壊と、ジェニー・リンドを合衆国の女王とすると宣言すべきである。そしてバーナムを外務省の秘書官とする。彼には小人サム、海蛇、そのほか彼の博物館に展示されて

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
いるもののような外交問題に長いこと知遇を得ている地位からみて、十分その資格があ
る。我々の将来への予想は実現し、次のようになった。

アメリカの最新ニュース。——ジェニー・リンド 電信による

「Punch」Office, 85, Fleet Street

印刷に回す数分間に、リヴァプールから次に様な重要な情報を受けた。

忌々しいキャプテン・スマートはニューヨークから五日間の航海のあと、やっと着い
たばかりである。そして次のような権威ある情報をもたらしている。

ジェニー・リンドはヨーロッパには戻らない。彼女のバーナムとの契約の結論として
(かなり省略しているが)、ジェニーは合衆国の女王として戴冠するであろう。現大統領が
穏やかに退位するであろう。ジェニーはかくも多くの歌を、地上の最も賢い国民のため
に、常に歌うという契約を認める。それ故に、大統領のスピーチを此処に記してきた。

「2つの星と1本の縞がアメリカの旗に付け加えられた。星はジェニーの目であり、
縞はジェニーの髪の毛の房である。」

これはいかにも「Punch」らしい皮肉たっぷりリンドに対するアメリカ人の歓
迎振りを表している。特に、この人気ゆえに、アメリカの大統領よりも人気のある
リンドを女王にして共和制から王制にしたらどうかと提案しているように思える。

「パンチ」は入場券販売のオークションについては一切触れていない。

13-3 1850年9月28日:「The Illustrated London News」——「Jenny Lind
in New York——First sale of concert tickets」——演奏会の最初の入
場券発売——(p. 254)

金曜日 (いわば大西洋横断同乗記) ジェニー・リンドの最初の演奏会における座
席選びのためのオークションが、キャッスル・ガーデンで行われた。この記事は1
頁の1/6強の長さである。さらに9月28日の一面のトップに彼女のポートレート
が描かれている。(図4) 内容としては、この後に紹介する「The Times」の10月1
日の記事と重複する部分もある。これは第2回目のオークションについての描写
であり、イラスト新聞の方は初回の入場券販売のためのオークション風景を描写し
ているので、一応要約しながら転載しておく。

興味深い風景として「額面高く入場券を買い上げるダフ屋を認めず、バーナム氏
に優先的に売った。彼は最高の値段をせり上げ、自らの利益とした」とある。

土曜の朝の天候は雨で、ジェニー・リンドの最初の演奏会の入場券の優先発売オーク
ション参加者は少ないと見積もっていたが、予定時間前からキャッスル・ガーデンの前
は、1sの入場料を取るにもかかわらず、3~4,000人が押し寄せていた。この入場料は

THE ILLUSTRATED LONDON NEWS



NO. 44—VOL. 17.— FOR THE WEEK ENDING SATURDAY, SEPTEMBER 14, 1895. (Continued.)

THE ILLUSTRATED LONDON NEWS is published weekly, except on Sundays and Public Holidays, at 11, Abchurch Lane, London, E.C. 4, at the office of the Proprietor, Messrs. W. & A. K. Paul, 11, Abchurch Lane, London, E.C. 4. The price of the paper is 6d. per copy, and 1s. 6d. per annum in advance. The paper is sent free to all subscribers who pay in advance. The paper is also sent free to all subscribers who pay in advance. The paper is also sent free to all subscribers who pay in advance.



図4 ジェニー・リンド嬢——アメリカに出発直前にとられた写真——リージェント・ストロートのキルバーン氏によるより

不当な行為だと不満が起こった。参加者は嵐のような大雨にもかかわらず、傘の行列が10時から11時まで1時間もバッテリー公園を取り巻いていた。これは普通の精神状態を超えた興奮であった。狂乱状態は土曜日に最高潮に達し、年配のグレー・ヘアーの男性たちが20歳の若者のように初日の演奏会の入場券を手に入れようと焦っていた。公開演奏会で彼女の最初の歌い出しを聞くことは数千人の最大の野望のように思えた。一人の商人らしき男性が、セレナーデの夜にジュニー・リンドを見た後、彼はなんとしても彼女を聞くべきで、もし\$100で2枚の入場券が買えれば、妻を連れて行こうと考えていると述べた。土曜日のオークションでの人々の熱狂振りは、スウェーデンの歌姫がこのニューヨークの港に到着して以来常に大騒ぎが起きているので、彼らの熱意が冷めないかどうか。

オークションには女性はいなかったが、この興奮状態は消すことのできない出来事として記憶されるであろう。

全席は全て番号が振られ、異なった色の旗で区割りが出来ていた。オーケストラ席はバーナム氏の従業員、オークションで券を買った人、そして報道記者が占めた。

ウォール街8番のヘンリー・リード協会の年長社員のリード氏は、オーケストラの前の観客席を登り、ジェニー・リンドが立つことになる場所に今や立っていると云った。(笑い) アメリカにおけるジェニー・リンドの最初の演奏会の最初の座席選択の権利を持ち、彼は最初の入場券を売り始めた。最初の入札は\$25であった。そしてアーヴィング・ハウスとニューヨーク・ホテルとの間でコンテストが長い間行われ、どちらの入札も爆笑する見物人の関心を集め大いに盛り上がっていた。3名の医師(名前が挙がっている)が券を買うために入札した。しかし帽子屋のジェニンが買う決心をし、この券を失うくらいなら\$500出してよいと従業員に指示したらしい。今までに、1枚の入場券のために支払われた額では一番高い\$225という高額で彼が落札した。事務員が名前をアナウンスすると、今までにない熱狂的な騒ぎが起こった。彼に指揮されている人々は椅子の上に立ち上がり、3回歓声を上げた。次の予約券はロビンソン氏に\$25で

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
売られ、値段は \$15 から \$10 まで落ち着いていった。最初の大量買いはアーヴィング・ハウスの私的なボックスの 4 席であった。2 人の主要な競争相手はアーヴィング・ハウスとニューヨーク・ホテルであった。後者はそれを \$35 で買い、4 席で \$140 である。500 枚の選択席を売った後、この建物の中で、奇妙なことに選ぶ特権があるにもかかわらず彼方此方ばらばらに席を確保するというような選び方をしている。15, 12, 10 ドル出した席より遥かによい席を後に 5~6 ドルの値段で買っている。売られた席と同じくらい良い席が未だ残っていた。オークションは次第に終わりだし、席の配置図がなかったので初めのうちは少し混乱した。しかし、選ばれた席と椅子が売り払われた後、オークション参加者は規則正しく入場し、勿論優先席として売られた席は全て入場を許可され、物事は速やかにスムーズに行われた。下方の最前列とギャラリーの最前列の席が先ず売られ、そして下方の 2 列とギャラリーの 2 列を売った。そして 3 時に 1,400 以上まで売られ、販売は延期された。ブロードウェイの音楽店ホール氏とその息子がかなりの枚数をタフ屋から買った。最後に売られた券は \$5 であった。平均の値段は \$6.38 である。入場券の前売りの売上げは \$9,119 であった。4 分の 1 は未だ売れ残っていた。そこで入場券が全部売れば疑いなく巨額の売上げが実現する。1 枚 \$3 でも空席が埋まれば全部で \$20,000 に達するであろう。

ジェニー・リンドのコンサートの延期された予約販売のオークションは、月曜の朝 10 時にキャッスル・ガーデンで再開された。土曜と同じオークション参加者のリード氏は、いち早く席を競り落とした。立席はもっと便利なギャラリーに固定された。会場は以前より混雑していた。非常に目立ったことは上流社会ではなく、ものすごい大群衆である。興奮が高潮していた。時間が限られていたため、リハーサルが 2 時に召集されていた。10 枚ではなく 20 枚のチケットを買う特権を、前の日と同じように買い手に与える必要があった。時間が差し迫ってきたら、1 人当たり 50 枚も売られ、最後には、最後から 4 番目の買い手にバランスを取る特権を与えた。1 度に 193 枚ホール氏が買いきった。プロムナード券が 400 から 600 枚を 1 枚に付き \$3 で、アメリカン・ミュージアムで売ると発表された。ギャラリーの上の階段席の場所は新聞社に割り当てられ、会場の下方の場所は報道人に割り当てられていたが、間違っていて売られてしまった。ホール氏が多く買ったのだが、ホール氏は 1,800 枚注文した。販売終了近く、彼の利益として \$2,000 を提供されたが、彼は断った。

この記事から聴衆はオークションによる入場券の販売に慣れていないようであり、また、オークションそのものを楽しんでいるようでもある。したがっておかしい値段がつけられている事が分かる。

13-4 1850 年 10 月 1 日 (火) : 「The Times」の記事

「Jenny Lind in New York」「ニューヨークのジェニー・リンド」の見出しで 1

コラムぎっしりと記載されている。9月17日ニューヨークの同業紙からの引用。以下はリンドに関する特別記事からの抜粋である。

ニューヨークでリンド嬢は凱旋的歓迎を受け続けている。11日水曜の夜に行われる最初の演奏会は£5,200に達し、見物人と聴衆の熱狂振りは言葉では言い尽くせないほどであった。リンド嬢は後に£200を音楽財団 Musical Fund Society に贈呈した。その見返りに生涯会員の資格を与えられた。ベネディクト氏ともう1人が名誉賞を授与され、そのお返しとしてニューヨークのオーケストラの水準の高さをヨーロッパで語るようになった。2回目の演奏会の収益は£4,400であった。3回目は18日に行われ、リンド嬢は『ハーデマンの山の歌』を歌った。彼女はニューヨーク・ホテルで隠遁者のごとく静かに過ごし、每晚従兄弟と秘書と乗馬を楽しんでいる。絶えずさまざまな招待状が送られてくるが、ほとんど断っている。12日にはドイツの合唱団リーダー克蘭ツが訪れセレナーデを歌った。そのお礼に彼らを中に招き入れ歓談し、彼女の演奏会で歌うように申し出ていた。ベネディクトが作曲した『思い出』を歌うことになった。

ここで、彼女はドイツ人の移民からなるこの合唱団に、祖国ドイツのほうが音楽や詩が豊かで郷愁を感じないかと問うているのに対して、彼らは反論している。

入場券の売り方と値段は重要なので転載しておきたいと思う。その問題をかなり詳しく報告している。

木曜日、キャッスル・ガーデンにて午前10時半、ジェニー・リンドの第2回演奏会の入場券のオークションが、リード協会により執行された。前2回のオークションほどの大きな興奮はなかったが、チケットに対する要望は確実に、よく売れた。平均\$4で売れ、更にプロムナード（ここでは平土間）券が\$2で、およそ500席が売れた。かくして6,000席が売れ、全席の売り上げは\$26,000であった。

ジェニン Genin の\$225の席はホール&サンズが\$5で買った席である。4席セットのジェニー・リンドの私的ボックスシートは1枚が\$5.5で買われた。舞台正面のボックスシートも同じ値段であった。最初のオークションで4枚\$140、あるいは1枚\$35で売られたジェニー・リンドの私的ボックスシートは買い戻されることになる。

チケットの最高額は\$9で、アーヴィング・ハウスが42枚を確保した。そのうち8枚が\$7.5であった。こうした例外はあるが、通常チケットは1枚\$5から\$3で売られた。ホール&サンズ社は\$3券を2000枚買った。チケットを購入したことを新聞紙上に名前を公表させる似非貴族主義者がいた。一部の名前を公表したものは、チケット代を支払い、妻も娘も同伴させずに自分たちだけで楽しむほど利己的であることを示している。女性の鑑賞は主に水曜の晩に限定した。

オークションで買われた券を、又売りするわけだが、競り落とした値段よりも安

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

く売ることはないと思うので、人気があれば、値段はプレミアムがつき、鰻登りに高く競りあがるであろう。それが、ジェニー・リンドの演奏会の値段が、他の誰よりも高く、めったにいけなかった理由のようである。エイジェントならぬ、通称ダフ屋といわれる仲買人が儲けるだけではないだろうか。このオークションによるチケットの売り方にリンドが批判的で、次回このキャッスル・ガーデンで演奏会を開く時にはオークションによる販売は止めてほしいと要望し、またチケットの値段も下げさせ、平均\$25に押さえ、また平土間のプロムナード席（立ったままか、良くてベンチがおいてあるか、椅子を貸し出す）は\$1に値下げした。

興味深いのはオークションで高い値をつけた人物の名前が公表されることであり、これは宣伝効果を持つために、入場券の高値も宣伝費と思えば安いと感じられたのかもしれない。

ジェニー・リンドがボストンへ行く前に、「キャッスル・ガーデン」であと4回演奏会を開く。

現在ではこのホールを使わざるを得ないであろう。また戻ってくれば、マーサー・ストリートのホールで歌うことになるだろう。キャッスル・ガーデンより収容人数が遥かに少ないから、チケットの値段は高くなるだろう。バーナムとの契約で彼女が受け取ることになっている\$150,000は、全額彼女の祖国の学校に寄付すると、アメリカ来訪以前から「Herald」で宣言していた。彼女はこの決意に執着しており、この総額は教育という高貴な目的のために当てられる、といわれている。彼女の友人たちはこの極端な物惜しみしない態度を改めるように忠告したが、彼女の答えは、両親のために備え、また自分自身のために十分な収入として年間\$6,000確保し、彼女自身、自分の声がまもなく失われるであろうことを察知しており、力の有る内に祖国のために義務を果たしたいというものであった。彼女の類まれな歌唱の独自性と、ジェニー・リンドが世界で最も人気のある女性であることを誰が疑うであろうか。

この1週間前にブラディー氏の当時最新の科学技術を用いた写真ダゲレオタイプのスタジオを訪れた。当時まだ「写真」に相当するフォトグラフという言葉もアメリカでは使われていなかったのか、likenessと書いている。彼女のlikenessを作るためにブラディー氏のスタジオを訪ねた。彼は客引きのためにギャラリーを経営していた。彼女がブラディー氏のギャラリーにいることが知られると、大勢の群衆がその周辺に集まり、出来上がるまでますます群衆は増え続けた。リンドは逃げ出すために、気が付かれないようにブロードウェイを避けて、フルトン・ストリート側のドアから出ようとした。しかし群衆にその動きを察知され馬車に手を突っ込んできた。馬車は完全に包囲され御者は馬を鞭打ち、1、2名が投げ出されたが、ひ



図5 1852年に写されたダゲレオタイプ(写真)。Matthew B. Brady and Luther Boswell

どい怪我はなかったり。(図5)

土曜には火曜の演奏会の入場券を買うためにパナム・ミュージアムに人が押し寄せた。オークションの時のようによく売れた。後のほうの席は\$2でプロムナード、ホールの下の部分で通路の周りの立席、バルコニー(天井桟敷)は\$4であった。

9月16日の昼の11時にジュニー・リンドの3回目の演奏会のリハーサルがキャッスル・ガーデンで行われた。^{バッキング}平土間は見物人で半分以上が埋まっていたため、リンドはリハーサルであって演奏会ではない、とかなり不快に思っていたようである。

そのために最初は歌うのを拒否するのではないかという雰囲気であった。リハーサル中、リンドはボンネットを被ったまま座っており、全力投球しているようには見えなかった。8,000人も収容する大きな空間で翌日歌うことになっている芸術家に全力投球することを期待するのは、無理である。その晩のプログラムには5曲歌う予定になっていたが、更に1曲が付け加えられ、『エコー・ソング』を歌うことになった。このような事は1晩に誰にでもできることではない。

最高額の席が少し残っているとのことであったが、当日ほんの短時間で全て売り切れた。今までになく満員になりそうである。今までイギリス人を何とか打ち負かしてきた。あるいはイギリス人を凌駕しようと勤めてきた。音楽の興奮において我々(アメリカ人)はイギリス人を打ち負かせるかどうかは、今後にかかっている。

これが要約を含めて、リンドのニューヨーク・デビューに関する「The Times」に載った「Herald」紙の内容紹介である。リンドとは関係なく、アメリカ人がイギリスにライヴァル意識を持っていたことを表しているのは興味深い。

次のイラスト新聞の記事は、イギリスのどの新聞も扱っていない記事内容である。それはアメリカでのリンド演奏会で、リンドが歌うことになっている懸賞詩を発表していることである。しかもその入賞作品のみならず、選に漏れたが、作品としてはこの方が良かったという作品も載せており、その理由が述べられている。

13-5 1850年10月5日:「The Illustrated London News」の記事

「Jenny Lind in New York」(p. 284にニューヨークのキャッスル・ガーデン

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

のイラスト) (図6)

ニューヨークのキャッスル・ガーデンでのジェニー・リンドの最初の演奏会の夕べは、抑制の効かない熱狂がニューヨークに蔓延した。6千人の観客が大きなサルーンにこの興味深い機会に集合し、スウェーデンのナイチンゲールの入場に歓喜するさまは、驚嘆に値するほど圧倒的であった。数分間で彼女の感情は落ち着きを戻し、

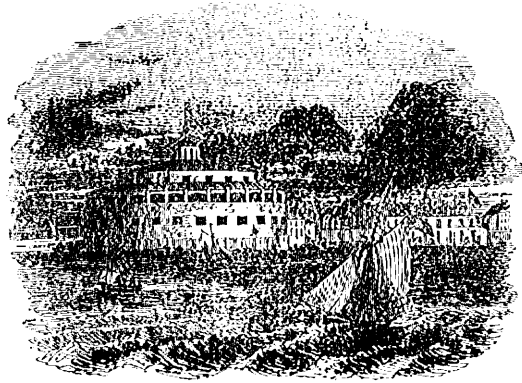


図6 キャッスル・ガーデン, ニューヨーク (現在はバッテリー公園であるが、勿論この建物は現存しない)

最初の歌、オペラ『ノルマ』のアリア「Casta Diva」でそれを証明した。演奏会が進むにつれて、ジェニーは全力を取り戻し、声の優しさと表情はなかったが、パトスはさらに勝利をもたらした。演奏会は懸賞歌を彼女が歌うことで締め括られた。それはバーナム氏が\$200を提供して募集した歌である。審査委員会はベイヤード・テイラーの入選を決定した。

Greeting to America

Words by Bayard Taylor—Music by Jules Benedict

I greet, with a full heart, the land of the West,
Whose banner of stars o'er a world is unroll'd
Whose empire o'ershadows Atlantic's wide breast,
And opes to the sunset its gateway of gold !
The land of the mountain, the land of the lake,
And rivers that roll in magnificent tidy—
Where the souls of the mighty from slumber awake,
And hallow the soil for whose freedom they died !

Thou Cradle of Empire! though wide be the foam
That severs the land of my fathers and thee,
I hear, from thy bosom, the welcome of home,
For Soud has a home in the hearts of the Free!
And long as thy waters shall gleam in the sun,
And long as thy heroes remember their scars,
Be the hands of thy children united as one,
And Peace shed her light on the Banner of Stars !

この詩は幾分変わっていて、内在的な価値で評価されたわけではないが、委員会がこれを入賞歌と決定するに至った理由は、これに旋律をつけるベネディクトが他の

詩よりも音楽を付けやすいということであった。他の委員は次ぎの「Boston Transcript」の編集者、エイプス・サージェントの作品を良しとした。

Salutation to America

Land of the beautiful, land of the free,
Often my heart had turned, longing to thee;
Often had mountain, lake, torrent, and stream
Gleam'd on my waking thought, crowded my dream:
Now thou receivest me from the broad sea,
Land of the beautiful, land of the free!

Fair to the eye in thy grandeur thou art;
Oh doubly fair, doubly dear to the heart!
For to the exiled, the trodden, the poor,
Through the wide world thou hast open'd thy door;
Millions crowd in, and are welcomed by thee—
Land of the beautiful, land of the free!

Land of the future. Here Art shall repair—
Kinder thy gale than her own Grecian air,
Since her true votaries ever have found
Lofty desert by America crown'd.
Where, in her pride, should she dwell, but in thee?
Land of the beautiful, land of the free!

Sculpture for thee shall immortalize Form,
Painting illumine, and l' poetry worm;
Music devote all her fervors divine
To a heart-service at Liberty's shrine—
Till all thy gifts doubly precious shall be,
Land of the beautiful, land of the free!

Hail, them, Republic of Washington, hail!
Never may star of thy Union wax pale:
Hope of the world, may each omen of ill
Fade in the light of thy destiny still—
Time bring but increase and honour to thee
Land of the beautiful, land of the free!

もしジェニー・リンズの素晴らしいヴォカリゼーションが喜ばせ、楽しませなければ、
いかにバーナム氏が彼女の慈善事業とニューヨークにおけるその他の公的組織に対する

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたか
高貴な行為を公表しても、この驚異的な熱狂はかくも高く盛り上がることはなかったであらう。演奏会の終わりに、バーナム氏は、実際舞台の上は捧げられた花束で文字通り埋め尽くされていたので、積み上げられた花束の山を払いのけながら、前に進み出て、次のように述べた。

「レディース・アンド・ジェントルメン、——皆様にただ一言申し上げたいことがあります。それはあの天使のような存在にとって（とってちょうどジュニー・リンドが通過したドアをさしながら）、私が全く卑しい存在であることをお許し願いたい。もし、私が普通に、「バーナムは何処にいるのか？」と尋ねられるような機会が出来ましたならば、その時はすでに永遠に過ぎ去っているに違いありません。率直に私は感謝します。こうした今晚此処になしたような催しを開いた後で、バーナムは何処にもいないと。しかし友人の皆さん、何処にジュニー・リンドがいるかを語らせてください。私は彼女の音楽的才能については何もいう気はありません。皆さんの方が私より多くのことをご存知でしょう。彼女の神のみぞ知りうる、そして名状しがたい声の才能を皆さんは今晚堪能されたこと、抑えきれずに賞賛の気持ちを示された。私は彼女についての環境をお話せずに、皆さんをお帰しするわけにはいかないのです。彼女は私が話すことを拒みましたが、普通ならば、彼女の希望に沿うようにするのですが、私にはそれをお話せずにはいられないのです。ジュニー・リンドと私との契約の下で、彼女は全演奏会の収益の半分を獲得する権利を有していることに、我々は合意しております。最初のコンサートで通常より多くの額を得ました。この機会に、彼女の得た利益はおよそ \$ 10,000 近くになりました。今朝、私は彼女からのメッセージを受けました。彼女は、この収益から1銭たりとも受け取らないというのです。けれども明日の朝、慈善の目的のためにさらに寄付したいと申しております。次のような内容です。

消防所に \$ 3,000, 音楽財団に \$ 2,000, 寄る辺ない人たちのホームに \$ 500, 貧困女性の救済に \$ 500, 演劇協会に \$ 500, 有色人と老人のホームに \$ 500, 有色人と孤児院に \$ 500, 女性貧窮者産科施設に \$ 500, ニューヨーク孤児院に \$ 500, プロテスタント半孤児院に \$ 500, ローマカトリック半孤児院に \$ 500, 老婦人施設に \$ 500, トータル \$ 10,000.

これ以上の金額が彼女にもたらされた場合には、改めて、後に適切な慈善事業に寄付することになっております。」

この発言の後、耳を劈くばかりの叫びが続き、それこそ表現の仕様もなかった。多くが、それも男性の聴衆の中でさえも感極まって泣き出すものが出た。夜中にジュニー・リンドはニューヨーク音楽財団により、彼女のためにセレナードが奏された。最初の演奏会の入場券により受け取った総額は正確にはわからない。しかし \$ 30,000 から \$ 40,000 といわれている。帽子屋のジェニンが買い取った驚異的な値段の \$ 225 のチケットは、おそらく一部は宣伝の目的もあったであろう。一部の人は友情からジェニ

ンのテナントであるバーナムに想像をめぐらす。

美しいジェニーは海を越えてやってきた。

共和主義者におもねるために。

忠誠のための微笑を誇めた。

帽子屋の宣伝のために。

ジェニーの2回目の演奏会は最初の演奏会と同じように満員であった。ニューヨーク市長およびそのほかの当局者、トルコ特命全権公使がちょうど到着し、そのほかの著名人たちが列席した。どちらの演奏会にもフィラデルフィアやボストンから多くの市民が詰め掛けた。2回目の演奏会の入場券は\$3から\$6で売られた。受益金は\$20,000を超えた。ジェニー・リンドは彼女のアメリカ訪問により受けた利益を、生まれ故郷スウェーデンに学校を設立するために貢献したいと発表している。彼女の要請により、バーナム氏は、将来、サルーン席のためのチケットに各\$2ずつを付加し、プロムナード席には\$1を付加するつもりであることを公表した。

第3回目の演奏会は蒸気船の出発で行われなかったが、(ニューヨークの新聞によれば)先週の日曜と土曜には絶えず席に人が群がり、入場券は前回のオークションよりは多少安く売られた。

3回目の演奏会のリハーサルが始まる前に、音楽財団の教会を代表してジョージ・ローダー氏がリンド嬢に、財団の特別委員会の決定として、彼女の寛大な寄付に感謝の意を表し、生涯会員の資格を授与すると宣言した。決議文は仔牛皮紙に清書されている。

懸賞詩を募集して自分を賞賛する詩に曲をつけた作品を、当の本人が歌うというのは珍しいことだと思うが、何の拘りもなく演奏されているようであり、その演奏についてのコメントは一切ない。しかしバーナムが、彼女の寄付行為について、観衆の前でアナウンスしたことで、ますます聴衆を刺激し感動させたようである。この事はイラスト新聞のみが報じている内容である。

13-6 1850年11月23日：「The Illustrated London News」の記事

「Jenny in The United States」——ジェニー・リンド嬢の名前は彼女が訪れる都市の宣伝コラムで、明らかに勝手に彼女のイメージを形成する。彼女の存在は何処においても、商業活動を活性化しているように思われる。ボストンおよびフィラデルフィアの新聞で、任意に次のような記事に会う。「賞状」は価値がある。——ハノーヴァー通りとサーレム通りの角にある店のW.B.リトル氏は「メカニック・フェア」の審判か

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたから 2 つのメダルと賞状を受け取った。……略……リトル氏がおそらく最も高く値をつけたものはジュニー・リンドから、彼女自身の次のような手書きの賞状である。「拝啓 お菓子の美しい見本をお送りくださり有難うございました。例外なく私が今まで見たなかで最も素晴らしい品物です。敬具。ジュニー・リンド ポストンにて 1850 年 10 月」

「Philadelphia Saturday Post」の最近号で「今週はジュニーについての記事を閉じなければならない」と述べている。そして「この都市のレストラン経営者に彼女から送られた特徴的な覚書を添えてあった。」このレストランの経営者は、彼女のテーブルにボボリンクの束を彼女の前に差し出した。：—これに対してリンドの手紙が記載されているが、ボボリンクとは可愛らしい小鳥で、それをくださるのは嬉しいが、小鳥にとっては不幸で残酷だと書いている。つまり森の中で踊っている方が小鳥にとって幸せでしょうという。

ポストンにおいて \$625 で入場券を買ったオシアン・E. ドッジ Esq は最高額の券を買った市民として描かれている。オシアン・ドッジはポストンの音楽ショップの経営者である。彼は 10 月 28 日の月曜の夕、トレモント・テンプルでの演奏会で披露された。ヴァーモント州のバーリントンのジョーン・J. サックス Esq はドッジ Esq が最高のコミック・ソングのために提供された \$50 賞の勝利者であることを宣言した。—New York Literary World (30 行)

*Esq は Esquire の略で、下の爵位。Knight の上で Gentleman 階級。
アメリカでの出来事を地方紙から転載して、当地でのリンドの人気の様子を事細かに再現して見せているのは、やはりイラスト新聞らしいと言えるかもしれない。「The Times」はそこまでは報じていない。しかし彼女のアメリカでの演奏会の報道は怠ってはいない。

13-7 その後のニュース

リンドがニューヨークについた 1850 年 9 月から 52 年の 5 月まではアメリカにおける報道になる。その後の記事の日付は 1855 年 11 月 8 日である。しかしこれも他社の記事からの紹介である。彼女はピアニストで作曲家のオットー・ゴールドシュミットと、アメリカのポストンで 1852 年 2 月に結婚し、しばらくポストンに滞在し、その後ニューヨークで「さよなら演奏会」を開き、来たときと同じアトランティック号でアメリカを後にした。次の記事は、1852 年 11 月 8 日夫と伴にパリに行き、そこで貧しい人のための慈善演奏会に現れ、2 週間ほどパリに滞在し、ロンド

ンに向かったという内容である。

1852年11月27日「Jenny Lind on Vocal Music」という記事は、ジェニー・リンドが若い女性に当てた個人的な手紙の抜粋である。これはボストンで「Dwight's Journal of Music」に発表されたものの転載である。

この記事は一人の若い女性が声楽を学ぶためにイタリアに留学すべきかどうかのアドバイスを得るために、知人を介してリンドに紹介されたので、それに対するリンドの返答である。これはイタリアで新しく歌唱法が考案されたことに対して、リンドは自然ではないので勧めないというものである。おそらくベルカント唱法であろう。さらにコロラチャー・ソプラノが出始めたことでもあり、リンドはヴェルディの声楽は、あらゆる声楽家にとっては危険であるとさえ述べている。歌手は作曲家のために犠牲になってはならない、とまで述べている。この若い女性にはロンドンでもパリでも声楽は学べる。ロンドンやパリに1年滞在すれば進歩すること請け合いである。ドイツは声楽にとっては良い場所とはいえない。それはドイツ語の発音が硬すぎるからである。声楽にとってはイタリア語が絶対に好ましい。しかしドイツは真の音楽の土地であるという。

真の芸術家であるなら、芸術の純粹の特質はドイツで身につけることができます。しかし芸術的良心を身に着けた優れた芸術家になりたければドイツとドイツの優れた音楽家を知らなければ、公衆の前で演奏するには大きな損失です。ドイツが芸術家にとって如何なる国であるか知っているつもりであり、またイタリアの音楽学校を精一杯崇拜もしています。けれどもドイツ音楽を基本的作業とみなしていなければ、私のイタリア式発声法の知識もなんら私を満足させることは出来なかったでしょうし、また音楽的才能も成長しなかったであろうと信じています。若い貴女の心に熱意を持って強い印象を与えようと願ったのは、イタリアの歌とドイツの音楽とを結びつけてほしいと思ったからです。それぞれが互いに必要としているものなのです。若い女性は、最も難しいアリアにおいても、最も単純な歌におけると同様、真実の美しさを見出す努力をすべきなのです。最大の秘密は本人自身にあるのです。恨みや妬みに対する最も強力な防御は本人の側に有るのです。

この文章から分かることは、これはあくまでも私見であるから、本音を述べていると見てよいであろう。彼女はイタリアへは訪れていない。イタリア語も下手であったといわれている。彼女はイギリスへ行くにあたり、英語の能力を気にしていたので、語学が声楽にとって重要であることは知っていたはずである。当時声楽、特

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたかにオペラの世界は、今でもそうだが、イタリアが中心であった。彼女もマイヤベーアとメンデルスゾーンにその才能を見出された人物であり、クララ・シューマンとも友人であったことから察せられるように、ドイツの音楽を演奏していた。それでもオペラを歌っていたころは、ヴェーバーの『魔弾の射手』がやっとドイツを代表するオペラとして上演され始めていたころであるが、ロンドンではイタリア語の題名を付けて上演されたとも言われているほど、なんと言ってもイタリア・オペラが全盛時代であり、やっとドイツ・オペラが上演され始めたころであった。ニューヨークでもイタリア・オペラの全盛時代で、ドイツ・オペラがやっと紹介される程度で、あくまでもイタリア・オペラ推進派がイニシアティブをとっていた時代であった。リンド自身もイタリア・オペラに出演していたことは事実である。さらに、この手紙で、ヴェルディの音楽は声楽家を苦しめるように述べているが、ヴェルディは彼女のためにシラーの原作に基づくオペラ『群盗』I Masnadieri を作曲しており、ロンドンでリンド主演により初演している。出演歌手たちは喝采を得ているのであるが、オペラ作品としては、残念ながら失敗作といわれているのである⁵⁾。

彼女がイタリアのベルカント唱法には馴染めなかったのであろう。イタリア唱法に批判的なのはそのせいであろうと思われる。しかし良い声を聞かせるための発声法を重視するのがイタリアであるならば、音楽の深い心を身につける文化的土壌はドイツである、と言いたかったのではないだろうか。

ただ、ヴァーグナーとその信奉者たちは、リンドに対して批判的であったという⁶⁾。

14 1858年から1887年の記事

14-1 1858年6月23日：「The Times」の記事

「Jenny Lind」リンドはアメリカから帰り、夫がドイツ人であったことから、夫と共にドレスデンに居を構えていたようである。そしてロシアへも足を伸ばそうと旅行を計画していたようであるが諦め、ロンドンに定住することに決めた。ドレスデンの住居の家具調度品はかなり高価なものが多く、それら全てハンブルク経由でロンドンへ向け発送された。ジェニー・リンドはロンドン近郊ウィンブルドンのヴィラに桂冠音楽家として引退することになっている。Nieder-rheinische Musik-Zeitung より。

1862年3月31日：「A Charitable Contribution」

リンド＝ゴールドシュミット夫人は来る5月および6月に、オラトリオ『メサイア』、『天地創造』および『エリア』をロンドンにおいて歌うつもりであることを公表している。ヘンデルの『メサイア』は「お針子被害者救済協会」The Institution for Distressed Needlewomen のため、ハイドンの『天地創造』はブロンプトン肺病救済病院 Brompton Consumption Hospital のため、メンデルスゾーンの『エリア』は大英帝国王立音楽家協会および王立女性音楽家協会を支援するためである。

1873年5月5日：[Jenny Lind. —Madame Jenny Lind-Goldschmidt]

ジェニー・リンド・ゴールドシュミット夫人は当月13日 Northumberland-house に
おいて、ウーリチの聖セイヴァース・ミッション教会の支援で、演奏会を行うことを約束した。

1883年7月4日：[Madame Lind-Goldschmidt] —— To the Editor of The Times ——

この編集者宛の抗議文は、リンドの自宅で行われたインタビューとして、アメリカで報道されたそうであるが、インタビューを行った事実はない。イギリスの新聞が載せたといわれているが、どうしたことかという抗議文である。

イギリスのどの新聞に載せたのかは不明であり、少なくとも「The Times」にはそのような記事は見当たらなかった。しかしこの投書に対して、何の返答もなく、そのままになっているが、編集者として、何らかのコメントがあっても良いと思われる。内容は彼女の自宅で行われた事になっており、彼女の生活とキャリアについてのかなり詳細な記事だったようである。投書は7月3日付きである。(11行)

この年にリンドは王立音楽院 Royal College of Music の教授に就任しているの
であるが、その関連記事はない。

1887年9月30日：[Jenny Lind] —— モルヴァーン・ヒルズの自宅で、彼女の健康が優れず、衰弱しているが、精神は異常ないという報道である。Her Faculties remain unimpaired

1887年11月1日「The Times」の記事

[Madame Lind-Goldschmidt] ——

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたか

リンド＝ゴールドシュミット夫人は、精神状態は明晰であるが急速に体力が衰え、非常に厳しい状態にある。

14-2 1887年11月3日：「The Death of Jenny Lind」死亡追悼記事

ここにリンド＝ゴールドシュミット夫人の死を報告しなければならないことを残念に思うとして、2日の早朝モルヴァーンの自宅で亡くなったとしている。

多くの人はジュニー・リンドの名前でその歴史を思い浮かべるであろう。Royal College of Music の声楽の教授の職を退いてからそう長くはない。この仕事が彼女の少女時代から親しんできた芸術の仕事の最後であり、彼女と同等の成功を収めた人物はそう多くはなかった。彼女は早い時期の絶頂期に舞台から遠ざかり、1870年が最後の演奏会の舞台であった。それは夫の作品『Ruth』をドゥッセルドルフで演奏したときのソプラノを担当したのが最後であった。しかしそれ以後も、慈善演奏会や私的な場所では時たま歌っていた。しかし現在のアマチュアの間では、見知らぬ人、あるいはかつての名誉ある人物程度に記憶されているに過ぎないであろう。引退して17年の歳月が経ち、存命の人たちの心の中にも、彼女のあり日の実践的芸術家としての輝かしい名声も薄れつつあるだろう。仮に、ゴールドシュミット夫人が30、40年前の、「リンド・フィーヴァー」の最中に亡ってれば、そのニュースはヨーロッパの音楽界にセンセーションを巻き起こしたに違いない。この損失は特に彼女を私生活で愛し、尊敬していた親しい多くの友人の間で、嘆き悲しみを持って受け止められたに違いない。

としてジュニー・リンドの生い立ちとキャリアについて書かれ、さらに彼女の演じたオペラ作品、そしてジュニー・リンドの業績と人格について述べているが、これまでの記事には書かれていなかった部分を拾って見ようと思う。さらにここでは彼女のイギリスに与えた影響について述べている。

スポンティーニの『ラ・ヴェスターレ』については、彼女のお気に入りの演目であったと言われているが、イギリスでは上演しなかったのか、それについて此処で取り上げた新聞には、記述は見あたらない。声楽の再訓練を受けるためにパリに行ったことはどれにも触れられているが、当記事によると1842年パリで一度だけグラント・オペラに出演したが、成功しなかったために以後パリではオペラに出演していないことが書かれている。このパリのオペラ出演についてはほとんどの文献は触れていない。彼女の名声がヨーロッパ中に知れ渡ったあとでさえも、パリでの出演を断り続けたとある。しかしパリに滞在したことで、マイヤベーアの知遇を得て、その後ベルリンにデビューすることになり、それを契機にヨーロッパの寵児になる。

パリの人たちは、結局リンドの舞台を見損ねてしまったことになる。そして、彼女と親しかった芸術家として、モシュレスとメンデルスゾーンの彼女に対する評価を引用している。

……モシュレス（ボヘミアの出身で、後にウィーンに出て一時期ベートーヴェンの弟子になり、F. リスト以前のピアノのヴィルトルオーソとしてヨーロッパ中に知れ渡り、イギリスでもヴィクトリア女王の前で演奏し、後にメンデルスゾーンの設立したライプチヒ音楽院の教授となる。作品もある）は、妻への手紙で「ジェニー・リンドに魅惑された。彼女は本当にユニークな存在で、2本のフルートとのアリアは、おそらく今までに聞いた中で最も信じがたいほどのブラヴーラ（熟練していて巧妙）である。」と書いている。こうした一流の音楽家による証言はさらにメンデルスゾーンによっても補強される、

として彼の言葉が引用されている。

「わが人生において、ジェニー・リンドほど高貴で、純粹で、真実を持った芸術的性質に出会ったことはない。自然に与えられた天賦の才、研究、そして感情の深さが同じ程度に一体となって統合されている状態に出会ったことがない。その資質の1つだけ取り出したならば、もっと優れていた人はいるであろう。けれどもこの3つの資質が全て同じ程度に統合されている存在に出会ったことは今までにない。」

死後に有名になった歌手は、こうした人たちからこうした言葉を送られても安全な基盤に立っているとは限らない。他の同時代の評論家たちは彼女について常に同じように好意的だったわけではないことは事実である。『19世紀後半の音楽回想録』の著者はロンドンにおけるジェニー・リンドのデビューを目撃しているが、彼は「私の耳には確かに幾分鋭く歌った、そして、プリマドンナが常に偉大なる芸術家であるとは限らないことも認める。彼女はただ4つのオペラにおいてのみ成功したに過ぎない。つまり、『悪魔ロベール』、『夢遊病の乙女』、『連隊の娘』そして『フィガロの結婚』である。彼女の『ノルマ』は完全に失敗である。彼女が絶えず鋭い^{シヤープな}歌い方をすることにより、それとは逆に顔の豊かな表情により無難に解消しているが、彼女のレパートリーが限られていたことは全く否定しようがない。舞台歌手としてのジェニー・リンドは偉大なる劇的情動の解釈者というよりは声楽の芸術家であった。アリスの十字架に面した場面での彼女の演技は注意深く研究した演技であることは確かであるが、我々が相談した有能な目撃者たちは、ジェニー・リンドは初めに歌い、後で演技する *soprani leggieri*（軽い持ち味のソプラノ）に属すると言う点で意見が一致している。彼女自身および一般聴衆の好むオペラは演技よりも歌うことのほうである。同時に、ジェニー・リンドおよび同時代の有名な同業者たちの一部が、いかに当時はやり始めていた、劇的な表現様式に本分を果たそうとしていたかを、思い巡らすことは興味深いことである。彼女自身の偏向は実際には舞台に対してでなかったことは、1849年と言う早い時期にオペラから身を引いたということによっても、十分証明された。それは同年3月18日に上演された

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

『悪魔ロベール』のアリス役で「如何なる舞台」での最後の出演になった。それ以来彼女の出演はコンサートに限られるようになった。彼女のキャリアの初期の舞台より新鮮で、有利でさえあり、榮譽を獲得した。彼女のスウェーデンの歌はその意味で他と比べ物にならなかった。そうした素朴で短い歌は町で大流行した。モシュレスを初めとする当時の流行の作曲家たちはそうした歌をピアノ曲に編曲した。しかしもっと成功を収めたのはオラトリオの芸術家としての地位であった。メンデルスゾーンのオラトリオ『エリア』の歌唱は、それを聴いた人の記憶に未だに残っている。シューマンのオラトリオ『楽園とペリ』のイギリス初演で、ジェニー・リンドが独唱のソプラノを歌い、女王臨席の下ハノーヴァー・スクウェア・ルームで演奏した(1856年7月)のも、この偉大なる芸術家のキャリアとして記憶すべき出来事であった。

ロンドンにおける1847年のデビューについても述べ、評判で人気を獲得し、したがって流行したあらゆる芸術の前奏曲になった。此処に2人のマネージャーの経緯が語られ、次のように述べている。

The lady's Continental successes and her private virtues, her charity, and her childlike innocence, were canvassed by the newspaper with a fullness of detail which would do credit to modern journalism of a certain class.

会場が満員になるようなイベントの夕べ、信じがたい値段の入場券がエイジェントにより販売され、流通したことは驚くに当たらない。「ジェニー・リンド^{フイグアー} 熱」が、それとなく流布され、そのシーズンに熱狂的になり、そしてハンカチ、扇子といった類の小物に彼女の肖像が描かれ、衰えを知らない勢いで次のシーズンに突入して行った。一人の年代記記者は、ジェニー・リンドの目が青かったので、皮膚の上の青い小さな斑点として描写し、「ジェニー・リンド・ポテト」とさえ表現している。著名な批評家チョウリー氏は次のように述べている。

1847年のシーズンの終わりにさえ、最初の瞬間から、新しいアリス、新しい夢遊病の乙女、ドニゼッティの——彼の最上の——魅惑的な、コミック・オペラの新しいマリアについてしか口にされず、また考えられなかった。各頁は市民の行き過ぎた行為を描写することに満たされていた。それはシドンスの告別を見ようと劇場の後ろのドアで何時間も待ち続けていた日々以来の出来事で、リンド嬢が歌う劇場の入り口で、少しでも近づいて場面を見ようと無駄に群がっていた。……要するに、町は神聖で深遠そのもので、〈スウェーデンのナイチンゲール〉に狂喜していた。

スウェーデン出身のオペラ歌手については徐々に語られるようになっていたようである。2年間のアメリカ旅行で稼いだ資金についてはやはりトピックとして取り上げられており、ここでも£20,000あるは\$3,000,000の巨額の富を稼いだこと

に言及している。ハンブルクで以前に知り合っており、コンサートで彼女を助けていた著名な作曲家のオットー・ゴールドシュミット氏と 1852 年ボストンで結婚した。アメリカでの懸賞金つき詩のコンペで優勝したベイヤード・テイラーが自叙伝を書いているらしいが、その内容については述べていない。

若いリンド夫妻はヨーロッパに戻り、最初はドレスデンに居を構え、後にヴィースヴァーデン、それからハンブルクに移った。しかし 1856 年ジェニー・リンドはもう一度イギリスで演奏会を行い、最終的にイギリスに落ち着くことになった。ほとんど社会からの相対的に引退状態で、賞賛する友人たちに囲まれたこの大芸術家は、生涯で意味のあった二つの課題に対する関心を決して失ってはいなかった。つまり音楽と慈善である。「グローヴ音楽百科事典」の著者は次のように書いている。

彼女がアメリカで稼いだ全ての資金は、生まれ故郷であるスウェーデンで芸術のための奨学金と慈善のために寄付し、設立した基金の財源とした。第二の故郷として選んだイギリスでは、ほかならぬ慈善の中でも、リヴァプールには全体として病院に寄付し、ロンドンにはもう 1 つの下部組織に寄付した。友人フェリックス・メンデルスゾーンを記念して設立した奨学金は彼女の援助と支援でさらに拡大増額し、彼女の寛大さと同情とはそれらを求めた人たちに、無駄な訴えになることは決してなかった。

晩年のリンド＝ゴールドシュミット夫人の関心は夫の設立したバッハ合唱団に対する積極的な関わりで、彼女の夫が指揮している限りは関わっていた。この団体の演奏会には、常にソプラノのパートの主唱を引き受けていた。休日は家で過ごすことを好み、モルヴァーン・ヒルズの傾斜地に建つ家を買ひ、そこで、夫と家族に看取られて亡くなった。

これが 19 世紀「The Times」の最後の記事になった。そして次の記事は生誕 100 年の 1920 年に現れる。

死亡追悼記事は「The Illustrated London News」と「Punch」にも 1887 年 11 月 12 日の記事がある。「Punch」の記事は詩になっているので、それを転載することにする。これは珍しく彼女を褒め称えている詩である。此処にも「The Times」からの引用がなされている。生年月日については、誕生年が間違っている。1821 年ではなく 1820 年である。この間違いは他にも見られる。イラスト新聞はかなり長い追悼記事でイラストが見開き 2 頁に渡り掲載している。

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

14-3 1887年11月12日:「Punch」Vol. 92 の記事 (p. 219)

「Jenny Lind」

1821年10月6日ストックホルム生まれ、1852年2月5日オットー・ゴールドシュミット氏と結婚、1887年11月2日逝去。

「彼女は生涯を通じて二つの主な課題に対する関心を決して失わなかった。それは音楽と慈善である。」——The Times

この後に MUSIC and Charity! で始まる5連の8行詩が書かれている。そして Vol. 16 の15頁参照、と書かれている。

音楽と慈善！ 全ての死せる物について、

我々の生涯の愛すべき人たちはこの二つの事柄を調和させることができるのだろうか。
天国の門の近くに心を引き寄せせるものは何か、

哀れみの衝動や旋律の感動させる歌よりも？

よく選ばれた、愛しい歌い手

天賦の才に恵まれ、出会いを作る大きな愛

ジェニー・リンドの経歴で全てがうまく調和していた。

こうした事柄が彼女の人生を楽しくし、彼女の記憶を親しませる。

パンチは、既にこうした仄めかしの表現を旨く使いこなし、

既に40年も前に、使っていた。

「夜に歌うナイチンゲール」として称えていた。

スウェーデンの歌姫のその悲しい声は

常しえに人の心を動かした。丁度彼女自身が

歓迎する大多数の心を動かしたように。そして一人

オペラの美しい合唱の花形スターの中であって、

いつでも直ちに鼓舞する能力を支援する！

「親愛なるジェニー・リンド！」だからパンチの歌は彼女のことを歌う

彼女ははまだ「ジェニー・リンド」なのだ。そして愛されている。

天才は褒め称え、流行を追う群衆は彼女を愛撫したけれど、

彼女は、ほかのスターの様に、闇の領域に沈むことはなかった。

暗い霧の中に

真実の優しい心を育てた人は抵抗する。

彼女の性格の名声は汚す力はない。

彼女の栄光が消えることもなく、大げさな賞賛も彼女をスポイルすることはできなかった。

群集はいかに駆けつけ、押しつぶし、騒ぎたてる。

40年前に、彼女の歌に夢中になった！

『夢遊病の乙女』のヒロインの虜になり

フルーツのように血湧き肉踊る甘さに刺激されて、

親愛なるナイチンゲールの強さのような

アミーナ、ルチア、アリス、それぞれ素晴らしい

熱烈な喝采で、その評判と興奮で、

彼女の銀色の歌への愛は彼女への愛と混ぜ合わさった。

そしてそれぞれが良く稼いだ！ 群集は押し合いへし合いし、

彼らの寵愛する歌姫の歌を聴くために、その喉から

雲雀のように明瞭に、スロッシル（歌鶯）のように心地よく

澄んだメロディーは飛翔し漂う。

いまや粉々になったリュートのごとく、

冬の巣の中で歌ったナイチンゲール

けれどもその純粋な人生だったことを長いこと忘れることはない

音楽に身を捧げチャリティーに献身したことで。

Vol. 16, p. 15 参照（本稿2頁1849年）

14-4 1887年11月12日：「The Illustrated London News」の追悼記事

「Jenny Lind」(Madame Lind-Goldschmidt) ジェニー・リンド（リンド＝ゴールドシュミット夫人の追悼文）(p. 561)——3コラムから成る1頁の1コラムと25行——

この追悼記事はある意味でジェニー・リンドの生涯にわたる人気の秘訣と音楽家としての資質および能力、表現能力、それに人格の全てについて集大成して纏めているので、この記事自体が「まとめ」になる内容だが、長いので此処に要約して紹介することにする。

40年前、「スウェーデンのナイチンゲール」がイギリスの海岸に降り立った。そして、それは自ら老人といわれること、また自ら年老いたことを認めざるをえない多くの人た

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
ちにとっては楽しい思い出となった、善良で慈悲深い上品な婦人、その気立ての良い性格ゆえに、長い間イギリスの私的な社会で愛されてきた、故マダム・リンド＝ゴールドシュミットは、若さと天賦の才能を發揮し活気に満ちていた。かつて彼女は奇跡的な声の力を持ち最も完成した技術^{アーツ}を凌駕した純粋な感情の表現において感動させる誠実さ、そして何はさておき、決して裏切ることのなかった人間としての本質的な淑やかさと優しさによる評判によって、音楽演奏の批評家たちに求められる集団をはるかに超えて人気を獲得し、憧れの対象になった。彼女が美人であるといわれたことはなかった。彼女の顔や表情の美点は、青い目、民族的な特徴の金髪、あるいは中庸な均整の取れた身体といった、彼女の肉体的特徴にあるのではなく、女性としての善良、親切、わざとらしくない自然で無意識的な、精神的雰囲気^{アトモスフィア}の表情のなかに、愛らしい精神が現れていた。それは最高潮の劇的演技のうちにおいてのみならず、日常の会話においてもその表情を活気付けていた。歌手としての力量と業績を判断できる人たちは彼女を大いに賞賛したが、多数の賞賛者は彼女をほとんど、人間性の道徳的優雅さの新しい個性的顕れと見なし、大多数の一般の人たちよりも純粋で、高貴な感性の持ち主であると彼女を信頼した。どこの社会にも、彼女と同じように善良な女性は大勢存在したし、また現在も存在する事は確かであるが、人々は特に彼女を気立ての良い人として賞賛した。後にガルバルディをイタリアの想像上の英雄に仕立て上げたロマンティックな情熱と同じ種類のヒロインとして、ジェニー・リンドは崇拝された。彼女の名前は何十万人もの貧しい人たちおよび労働者階級から慕われた。彼らは貧しい家で、ロンドンの路上で、誰一人として彼女を見、またこの有名な歌姫を聞いたこともなかったにもかかわらず、純粋無垢な単純な心を深く掻き立てる理想的な人間性のシンボルになっていたのである。(下線は引用者)
この時代に有名であった実在の人物で、かくも高い賛美の対象になり、その賛美を実際に美德とした人物は他にはおそらく存在しなかったであろう。しかしこの種の崇拝現象はいくつか目撃されている。何か優れたものに自然に憧れを持てるような存在や、その存在を見事に信じてしまうことを実証している。それは日常の倦怠感と凡庸さにより、飢えていたものである。

ジェニー・リンドという——むしろ共通項のない用語を使えば——「情熱」^{フュロレ} Furore を思い起こせる人は比較的少ないであろうが、ロンドンのオペラ界にたった2年間ではあったが、彼女が出現したことについての明確なイメージを持ち続けているに違いない。彼女が初めてコヴェント・ガーデン・オペラ座に出演したのは1847年5月4日であり、そして1849年5月18日に去った。彼女がオペラからの引退を決意した動機について公に発表したかどうかは定かではないが、当時は彼女が流行のオペラの主役と、相容れない宗教的義務とを見境なく演ずると思われていた。『椿姫』とその他いかがわしい内容の作品といわれたものを、演じていたことについて後になって批判されたこともあった。しかしジェニー・リンドはそうした作品を承諾して演じていたわけではないことは確か



図7 6つ場面：①ヴェルディ『盗賊』 ②ドニゼッティ『ランメンモールのルチア』 ③Exeter Hallのジェニー・リンド ④『悪魔ロベール』のアリス ⑤『連隊の娘』のマリア ⑥『フィガロの結婚』のスザンナ 上の左から右へ①→②



図8 故リンド=ゴールドシュミット夫人 (ジェニー・リンド) のポートレート (写真より作成)

であった。地方執事スタンリーの父、ノーリッチの優れた主教スタンリー氏とは親しい友人で、彼女の宗教的の信念を培った人物である。彼女は金銭上の収益に関して、莫大な犠牲を払っており、さらにオペラ（リリック）の舞台を放棄して、通常女性芸術家としての輝かしい野望を成功させたにもかかわらず、それを犠牲にした。しかし、彼女の良心へのこだわりと忠誠心が彼女にとって多くの報償となった。オラトリオにおいて、彼女の強力な宗教的感情が、その表現に有り余る表現の幅を与え、慈善演奏会では続く

10年間を時々歌い続けた。……（このあとは「タイムズ」紙と共通した内容をより詳しく報じている）……

……彼女はパリに出て研鑽を積み、マイヤベーアに認められ、彼の予言どおり、若い芸術家としての輝かしい経歴を踏み出すきっかけになった。1844年にはベルリンとドレスデンに1846年にはウィーンで出演した。メンデルスゾーンとモシュレスは「深遠なる感情を籠めて、かくも気高く、純粹で、正しく芸術の本質を再現することに、祝福され続けていた」と書いている。彼らは共に彼女のユニークさを強調し、また彼女の声に驚かされている。彼女の輝かしい経歴の先制行動は十分に成就された。

ジェニー・リンドのこの国でのデビューは1847年であった。……今なお口にされる興奮状態の期待によって、聴衆が劇場に足を運んだ音楽家のデビューはなかった。スウェーデンの若い歌手の超越的な美徳についての報道が長いこと行き渡り、ヘイマーケットのオペラハウス（建物は1867年に火災で崩壊し、その後現在の構造に再建された——これはHer Majesty'sのこと）の舞台に初めて出演した時は聴衆が押し寄せあふれて熱狂的に歓迎された。こうして獲得された成功はそのままずっと維持され続けた。しかしながら、ジェニー・リンドのオペラのレパトリーは広くなく、悲劇的あるいは英雄的な深さを追及するというよりは、むしろ洗練された優雅さと真実の表現を特徴とする性格表現にその真髓があり、大きな成功を収めた。例えば、声の華やかさとか魅力によるというよりも、比較的僅かな効果を産み出す『ノルマ』のような作品である。彼女は驚くほど声量が豊かで、特に例外的に広い高音域を純音（裏声ではなく）で、しかも声が良く透った。それは銀のトランペットの透き通った美しい音のようであり、しかも極めて繊細にコントロールされていて美しかった。彼女の演奏は最高の芸術的可能性を完成させていた。

Her Majesty's Theatreにおける1847年5月に上演されたドニゼッティのオペラ『連隊の娘』のマリア役は、ヴィクトリア女王およびアルバート公およびアデライーデ女王がご覧になった。女王陛下（わが現在の優雅な統治者）はジェニー・リンドを楽しみ、この魅力的な歌姫に2回も豪華な花束を自らの手で投げられたことは、それまでにないことであった。その年の7月、ヴェルディのオペラ『盗賊』がシラーの悲劇『Die Räuber』を原本として創作され、同じ劇場で、ジェニー・リンドが主演でアマリア役を演じ歌った。1848年7月モーツァルトのオペラがHer Majesty's Theatreでラムリーにより製作され、ジェニー・リンドがスザンナの役で出演し、最大の喝采をえた。5月、6月のシーズンの初め『ルチア・ランメンモール』のヒロインの役での出演は、それまでのオペラ舞台始まって以来の最も素晴らしい性格描写の演技と歌であったといわれた。彼女は決して単なる声をひけらかすことはしなかった。しかし偉大なる俳優のごとく、人物表現に全身全霊を込めて自らを投影した。そしてサー・ウォルター・スコットの悲劇的物語に籠められた苦惱する感情と精神錯乱状態に陥る断末魔の激しい死闘を、圧倒

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたか
的な力と真実をこめて演じ歌った。この時代の批評家たちの言葉を引用するスペースがないので、ジュニー・リンドの劇的表現の天賦の才は音楽的表現力に勝るとも劣らないと評価していたことを述べておきたい。しかし彼女の最大の魅力は芸術表現というよりは純粋な個人としての性格で、もっぱら彼女自身であることを望んだことである。

この全ての人から愛された女性は今月の二日にモルヴァーンに近い自宅で死去し、モルヴァーン大墓地 Great Malvern cemetery に先週の土曜に埋葬された。葬儀は彼女の夫と息子そして家族と親しい個人的な友人が参列して行われた。マイケル・ビッドルフ卿がヴィクトリア女王および他の王室の代理として参列し、墓石に白い花輪を捧げた。

此処に掲載したマダム・リンド＝ゴールドシュミットの肖像画はピムリコのエバリー・ストリートの W. & D. ダウニー兄弟による写真を原にして印刷した。

(図版 7, 8 は見開き 2 頁で 1 頁：リンドが出演した演奏会とオペラの 1 場面の 6 枚セット 2 頁：文末に説明されている彼女のポートレートである。)

15 まとめ

先ず掲載紙 (誌) を比較してみる。

最後に、「イラスト新聞」の追悼文を載せたが、「タイムズ」紙と比較して、前者の方が死者に対して好意的である。後者は当時の批評家の言説を引用して、リンドの弱点も述べている。ここに批評家としての専門家とアマチュアの聴衆との視点の違いが歴然としていることが分かる。「イラスト新聞」は聴衆の視点を代弁しているといつてよいであろう。全般に好意的で、逸話的なものを多用し、分かりやすく多くの読者をひきつけようとしている。

彼女の生存中には「タイムズ」も決して彼女に批判的な記事は記載しなかった。時間の経過とともに、彼女が早期に実践から引退したために、執筆者も実際に彼女の声を聴いたことのない世代に代わっており、聞き込みによる記事の執筆を余儀なくされているようである。したがって追悼文ではかなり客観的に、専門家の意見を引用しながら、彼女の演奏と其の作品に対する解釈について記述していることから、音楽家としての彼女について批判的な人がいたことを明らかにしている。

彼女は慈善事業に貢献したことで、いたる所にその名前が刻まれているのである。病院、あるいは病棟の名称に、あるいは碑に、メダリオンに。勿論スウェーデンでは其の比ではないが。そのために彼女の名前は一部の市民の脳裏に焼きついている。その点では誰も、またどのジャーナリズムも認めざるを得なかった事実のようである。

『パンチ』は創刊の趣旨通り、記事自体が「詩」であり、「ドラマ」である。そして初めは「何処の何方様のつもりか」といった態度であった編集者および執筆者も、実際に彼女の演奏に触れてみてリンドの魅力に脱帽したことを告白している。

要するに、彼女の報道の仕方を、此処に引用した3誌から読み取ると、以下のように纏めることが出来る。

やはり、裁判沙汰になったことが、スキャンダルとして売名についながり名前が知れ渡り、初めは「何処の馬の骨か分からない奴」「何方様のつもりか」といった批判的な受け止め方をしていたのだが、実際にロンドンに上陸し、其の演奏を聞き、演技を見たとき、態度が一変した。それはどのジャーナルも同じであった。その意味ではジェニー・リンドはそれまでロンドンでは見られなかったタイプのオペラ歌手だったことを意味しているであろう。それは何処が違っていたのであろうか。しかもヨーロッパの首都と自負する大都会ではあるが、オペラの世界では後進国で、自らの一流の作曲家も演奏家も輩出していない時代で、経済的には産業革命を経験しており、人口も集中して中産階級が急増していた、確かに文字通りヨーロッパの首都であったロンドンで、それまでに当地で出演したオペラ歌手とは異なった存在であったからこそ大騒ぎして受け止められたのであろう。

ドイツのオスカー・H・シュミッツがDie Land ohne Musik（音楽のない国）というとき、それはイギリスを指している。ドイツ人から見て、20世紀初頭にイギリスは音楽のない国に見えたのであろう。それは先述したように、パーセル以来国際的に認められるような作曲家を生み出していなかったからかもしれない。しかし演奏会の数は多く、出演料も高かったために、外来の音楽家は後を絶たなかったのである。

彼女の何処が他とは違っていたのであろうか。それは彼女がただ歌うだけのオペラ歌手ではなかったということで、演技力を持っていた。しかしそれは彼女が始めたことではなく、当時次第に演技を求める傾向が出てきたことに言及した記事がある。しかもジェニー・リンドは演技派のオペラ歌手というよりも、演技は歌の後から付いてくる歌を主体とした歌手であるとき「タイムズ」の追悼文では断言している。この点は専門家と、一般聴衆との隔たりを感じさせる。一般読者の新聞記事では演技派であることを強調していたが、音楽評論の専門誌『アトリウム』の執筆者で当時の主導的音楽評論家チョウリーは、もっと冷静に批評しているようであ

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
るが、だからといってそれが正当であるということにもならないであろう。また彼女の持ち味であったベルリーニのオペラ『ノルマ』の解釈に関して、世間を二分した論争が行われ、ヴィクトリア女王はリンド派で、評論家チョウリーはグリーン派でリンドの「ノルマ」は失敗であったと評価しているようであるが、『ノルマ』の解釈については、現代の2003年に東京で行われた、『ノルマ』についてもいえることであった。20世紀を代表する名コロラチュール・ソプラノ歌手エディッタ・グルベローヴァが演奏会形式で行った『ノルマ』に対して、毎日新聞の特別編集委員梅津の論評を除いて、前宣伝ほどには、どの新聞も批評を載せなかったのである。それは『ノルマ』に対するイメージが、マリア・カラスによって作られたイメージが強烈で、そのイメージが判断の基準になり、それとは異なった解釈に、日本の評論家たちが、歌手の名声度から、批判的には書けなかったか、戸惑ったか、編集会議で否定されたかであろうと思われた。それは、まさに当時のジェニー・リンドの演ずる「ノルマ」像と共通するものがあったように思う。

ジェニー・リンドの『ノルマ』は失敗であったとチョウリーは書いているようであるが、スウェーデンの現在の流通貨幣の50 Fentio Kronor はジェニー・リンドの肖像と『ノルマ』のアリア「Casta Diva」の楽譜が描かれているのである。ただ考えられることは、「ノルマ」は古代ケルトの女王である。ロンドンがかつてロンディウムといわれた古代ローマに占拠される以前に支配していたケルトの女王、ブディカがモデルなのではないか。そのように考えると、イギリス人にとっては、ブディカの印象が強く、自分を敗北に追いやった敵ローマにより陥落したロンディウムを焼き討ちにする復讐心に燃えたケルトの女王のイメージがあると考えられる。そうだとすれば、やはり、「ノルマ」は復讐心に燃える情熱的なノルマなのであり、掟に背き、敵の將軍を愛してしまい、密かに二人の子供まで儲けてしまったが、かつての恋人の將軍も、部下の若い巫女に心移してしまったことを知り、すでに自分には関心を示さないかつての恋人に怒りのたけをぶちまける復讐か、子供を殺して自害することを思い立つが、哀れに思い、子を思う母親の愛を前面に出してノルマの父に子を託して、自ら掟を破ったケルトの宗教ドゥルイト教の巫女として、責任を果たし処刑される道を選ぶ、母性愛に満ちたノルマ像を強調するかのどちらかであろう。リンドが演じたのは後者ではないかと思う。それはイギリス人のケルトの女王のイメージとは違っていたのではないだろうか。しかし一般の聴衆にはブディカの歴史は知る由もなかったのかもしれない。

此處で、当時のジャーナリズムの報道から読み取ることの出来たことを挙げてみる。少なくともヴェルディのオペラ『椿姫』はフランスの文豪小デュマの小説『カメリア夫人(椿姫)』であるが、これは高級娼婦の話である。そのせいか、このオペラを「いかがわしい内容」と評していることである。当時は高級娼婦を題材にした話が多く、しかもオペラになったものに『マノン・レスコー』(異なる作曲者の同じ原作による作品が複数ある)『蝶々夫人』などがある。後者は日本では日本の女性とアメリカの船員との愛と悲劇と捉えているが、娼婦の扱いである。こうしてみると、これらも「いかがわしい内容のオペラ」ということになる。こうした道徳観で見ていた時代と地域があったことが分かる。フランスでは普通でもイギリスでは認められなかった領域があったことも事実である。

これはそのつど触れたのだが、演出家の存在が見えてこないことである。作品分析、演奏上の解釈等については、俳優に課せられたことのようなようである。それが演者の批判になっている点が、今日と大いに異なる点であろう。特に、俳優の演技、歌手の演奏に対する批評というより、聴衆の反応が注目されている。新聞記事は劇場ごとに書かれているか、音楽の項目として書かれているのであるが、ジュニー・リンドに関しては個人に関する記事として書かれているので、やはりアイドルとしての存在に注目されたのであろう。他のオペラ歌手に関しては特別の項目ではなく、劇場および音楽の項目の中で固有名詞が登場する形をとっているからである⁷⁾。アイドル・グッズが生産され、販売され、愛用されたようであるが、これもジュニー・リンドが初めてだったのではないだろうか。

リンドが演じたドニゼッティのオペラ『ランメンモールのルチア』とベルリーニの『清教徒』については、新聞記事としては取り上げられていないが、追悼記事では褒めている。何故生前記事にならなかったのか不明である。その他、マイヤベーアの『シレジアの野営』や『ユグノー教徒』についても批評はない。聴衆の評判が悪かったわけではないのに、新聞記事としては扱われていないのである。モーツァルトは全体的に成功しなかったと書かれているにも関わらず、チョウリーはモーツァルトの『フィガロの結婚』はけなしていないのである。新聞記事は評価が分かれたものは記載しなかったようにも思える。

リンドのためにヴェルディが作曲したシラーの原作による『盗賊』については作品については何も論評がなく、演者だけが褒められて人気があったと書いている程度であるが、「イラスト新聞」の追悼文にイラストが載っているのは初めてである。

あら捜しや批判があったことを述べているが、どのメディアが批判的であら捜し

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたかをしたのかは不明である。此処では『ノルマ』とモーツァルトの作品に対してのみ、『パンチ』の戯曲から判断しうる範囲内でしか分からない。

ドイツでは『連隊の娘』を取るに足らない作品と試してみたり、可愛らしい作品と試したり、判断がまちまちであることも分かるが、ドイツ人の好みに合わなかったのかもしれない。ロンドンの演劇博物館にはリンド扮する『連隊の娘』の人形と、身につけていた赤いバラのネックレスが展示してある。現在でも余り上演回数の多い演目とはいえない。

いずれにしても現在と当時とで、演目に対する好み、あるいは人気が異なるようで、当時も現在も人気のある出し物は、モーツァルトの作品と解釈に問題の多い『ノルマ』と試してみてもよいかもしれない。

ジェニー・リンドの人気は元来大陸において名声を博し、スター・システムの導入で、劇場を盛り上げるために、大陸の人気歌手をよび寄せて劇場の活性化を図ろうとしていた時代であることが分かる。その意味で作曲家や演出家よりも Prima Donna で持たせる時代であったことを意味している。そのためでもあろうが、リンドの出演するオペラを見るために、大陸からはるばるドーヴァー海峡を越えてロンドンや地方都市にやって来る人たちがいたことが分かる。現在のように欧米のフェスティバルにツアーを組んで出かけるのとは異なるかもしれないが、個人で見に出かけることは可能であり、現に多くの日本人が欧州のオペラ座や演奏会に出かけているのである。また、'80年代より、いわゆる「追っかけ」と称する特定の歌手の出演を追いかけて各地に出かけていくファンが現れたようであるが、その先駆けといえよう。

少なくとも19世紀の前半はまだ上層階級のイギリス人が大陸にグランドツアーの一環として出かけ、オペラや演奏会を聴いていた時代であった。当時のイギリスは産業革命を経験したヨーロッパの大都市として、公開の演奏会の数も増え、有名人を大陸から呼ぶために出演料が高騰し、それ故に演奏会の値段も高かったといわれていることから、リンドの演奏会の値段がことのほか高かっただけではないようである。一般にイギリスは出演料も高く外来の演奏家によって牛耳られていたことは、イギリス出身の演奏家、音楽家で国際的な人物がまだ出現しておらず、その点1980年代の成金国家日本を髣髴とさせるものがある。しかしこうした演奏会の値段を新聞で公表するだけでなく、演奏会の利潤や出演者の利益まで公表していることも珍しい。リンドの演奏会の値段が高かったのは、特にイギリスだけではなく大陸でも他の出演者に比べて高かったようであることから、誰でもいけるものでは

なかったといわれているのであるが、無料出演も行っている。

当時はポピュラー音楽とクラシック音楽の区別があったわけではなく、19世紀末になり中産階級が台頭し娯楽としてミュージックホールが人気を博しはじめてから、ポピュラーな歌謡曲の歌い手に人気が出て主としてカリカチュアの対象になったりするが、それまではオペラ歌手が人気歌手だったのである。そのことから勘案すると、ジェニー・リンドは初期のアイドル歌手といえるし、新聞記事にもアイドルという文字が見える。しかし30歳のアイドルであるから、現在とはかなり異なるだけではなく、オペラ歌手であるから当然ともいえよう。

当時の世界の首都としてのロンドンとは別に、産業革命をいち早く経験し栄えた都市として、リヴァプール、マンチェスター、バーミンガムなどが上げられる。リンドはこれらの都市で演奏会に出演しているのであるが、特にリヴァプールではオペラも、また演奏会にも出演し、此処でのオラトリオの演奏会には、当地の合唱団が参加し、その合唱団はイギリスでも屈指の合唱団と紹介されている。さらにフィルハーモニー協会と新しく出来たコンサート・ホールが紹介されている。当時としては工業都市に新興ブルジョアジーの台頭で繁栄を見た都市として、新しい演奏会場を建立し、下層階級の楽しみの1つであったアマチュアの合唱団が結成され、オラトリオ祭を行い、町の繁栄を支えていたことが判る。そしてジェニー・リンドがアメリカへ出発するのもこのリヴァプールの港からであった。こうした演奏会の聴衆が、入場券が高いにもかかわらず、何とかして出かけようとしていた肉体労働者のいたことも記事から伺い知ることが出来たが、そうした情報も口コミによるものであろう。さらにその口コミは新聞からの情報というよりは、ジェニー・リンドの慈善活動を通してその名前が広がり、貧しい人たちへの貢献から、演奏会は知らなくてもその名前を記した碑があったり、病院の名前についていたりすれば、いやでも知ることになるのではないだろうか。演奏家、オペラ歌手としてのジェニー・リンドとしてではなく、慈善活動に熱心なオペラ歌手として、その名前が貧しい人たちにも広まったと考えられる。

そして博愛主義者としての人格こそ、ジェニー・リンドを他の歌手との差異を印象付けており、それが人々の心を捉えたことについて、言及しないわけにはいかない。

追悼文は彼女が第一線から引退してからかなり時間が経過してから書かれているので、生前の活躍当時の記事とは異なりかなり冷静に、リンドの欠点にも触れているが、生前の記事は「痘痕もあはたもえくぼ」的な要素が無きにしも非ずであった。しかし彼女

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたかの歌唱力は人並みであったか、演技を取ったらそれほど優れたものではなかったということなのか、評価にはばらつきがあったようである。しかし声量は豊かであったことは確実で、当時の記事は聴衆の反応を正直に伝えているように思われる。面白いことは、アメリカ遠征の記事から、当時のアメリカ人とイギリス人の間に、ライヴァル意識があったかのような記述が見られたことである。リンドのアメリカでの歓迎振りのほうが、イギリスでの歓送の仕方より豪華ですごいことを誇っているからである。

そしてオペラ歌手が、民謡など (ジュニー・リンドの場合はスウェーデンの俗謡) を歌うことに対して、アメリカでも多少批判する向きがあったようであるが、彼女の歌った歌を、ヴィルトゥオーソがピアノの演奏会用パラフレーズにしまた彼女のために作品を書いている。J. シュトラウス Jr. もリンドのためのワルツを作曲している。さらにオペラ歌手がポピュラーな歌を歌うことは 20 世紀末の 3 大テナーのコンサートを思わせるものがある。当時やっとクラシック音楽という概念が使われだした時代であったように、クラシックとポピュラーの区別は、現在とはかなり異なっていたことは事実である。

ジュニー・リンドがロンドンに初登場するきっかけに、裁判沙汰があり、その経過が前述のように逐一報道されたことが、スキャンダルとして、彼女の名前を広める契機になったことは否めないようである。これも 21 世紀になって、同じ様なことが見られた。ロシアの若い女性のドゥオ「タトゥー」というグループが、来日しているながら舞台をキャンセルして話題を提供し、新聞種になったことは、彼女たちの名前を売るきっかけにはなったかもしれないが、果たしてそれが彼女たちの名声につながり、以前より人気が出たことになったかどうかは、はなはだ疑問である。時代が異なるだけではなく、人気稼業のあり方も異なり、アイドル歌手の数がかくも多い時代では、スキャンダルでも「またか」というに過ぎないのではないだろうか。

このジュニー・リンドの短いが急激な人気とアイドル歌手の誕生を見ていると、現在の人気歌手、またアイドル歌手の誕生の発端が、すでに見られたように思う。数こそ異なるが、アイドル・ブランドというか、アイドル・グッズが作られ、売られて人気を博していたのである。やはりこのような現象は、身分の差を越えて、入場券を払えばいける演奏会が公開されるようになったことと、そうした演奏会を満員にするだけの中産階級が都市に登場し、余暇を楽しむことが出来るようになった消費社会が、都会を中心に形成されていたことを物語っているのではないだろうか。

現在は演奏会の数も多く、またアイドルも余りにも数が多すぎ、いかに淘汰していくかが問題になっているように思う。それが「Tatoo」と「リンド」との違いであろう。

またマネージャーという職業がクローズアップされ、演奏家のキャンセルにより受ける損害を補うための保険が生まれたことが報道されている。それ以前にあったかどうか不明であるが、ジェニー・リンドが初めて適応された例ではないだろうか。ともかく、イギリスの保険会社が始めて設置した保険であるといわれている。

「タイムズ」が述べているように、個人の行動を詳細に追い、報道することが新しく出現したジャーナリズムのあり方であるとすれば、ジェニー・リンドの報道が後のジャーナリズムの先駆となったともいえよう。

こうした報道は「イラスト新聞」が述べているように、日常生活の倦怠から逃れる非日常性への渴望の対象として格好の対象であったことは確かであろう。さらに中産階級が台頭し都市に集まり、高等教育を受ける機会も人数も増大したことが、新聞の部数を増やしていた時代でもあった。リヴァプールやマンチェスターでいち早く産業革命を経験したイギリスで労働運動が起こり、労働者階級にとっても息抜きの憧れの存在になったと思われる。

注

- 1) ロンドンの the National Portrait Gallery に展示されている最もポピュラーなものは Eduard Magnus のものである。(前号(1)の図I参照)
- 2) グルックとピッチェーニの論争は18世紀フランス革命前のパリで、オーストリアでグルックの音楽の弟子であったマリー・アントワネットがグルックを招き、オペラを上演することになったのであるが、パリはブフォン論争の最中で、同じ台本で、両者にオペラを作らせ、どちらが良いか競い合わせたことを言う。(ピッチェーニ≠ブッチェーニ)
- 3) 9月1日に New York に到着した際の情景は、その情景を目撃した人物の証言として「Ladies Home Journal」の1896年11月号に載ったものは拙著『19世紀ジェニー・リンドというスーパースターがいた』p.20と注39参照。
- 4) ダゲレオタイプの写真は当時の著名人を多くモデルにしているので、バーナムやリンドのものがある。ニューヨーク・タイムスの2000年1月23日に記載された写真が現存しているものである。Chrysler Museum of Art, Norfolk, Virginia 所蔵。当時は大変高価なものであったために、被写体の人物は限定されていた。
- 5) 2002年ロンドンのコヴェント・ガーデンで上演された。また日本でも琵琶湖ホールで上演されているが、めったに上演されない作品であることは確かである。日本のオペ

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
ラ作品解説書にはヴェルディがスランプ状態の時に作曲した作品のために評価されない、
といった類の解説が書かれているが、それは間違いで、急いで台本を作らせたために問
題があったと解釈したほうが適切であろう。

- 6) FAZ (Frankfurter Allgemeine Zeitung) 1987年11月3日 死後百年祭の記事。
- 7) 例外として、イギリスにおける Louis Jullien (1812~1860) がいる。勿論ジャーナリズムにフランツ・リストなども登場するが、作曲家で指揮者として人気のあった、イギリスにおけるダンスミュージックやプロムナード・コンサートを確立し、名を馳せたスイス生まれの音楽家である。ウィーンの J.シュトラウス Jr. (1825~1899)、パリのフィリップ・ムザール Philippe Musard (1793~1859) と並んで、ショウマンシップを発揮して人気を博しイギリスとアメリカで活躍した。「パンチ」、その次に「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」には良く描かれた人物である。

参考文献

- W. ウェーバー著『音楽と中産階級』法政大学出版局 1983
D. リースマン著『個人主義の再検討』上下 ベリカン双書 1969
Oskar A. H. Schmitz『Das Land ohne Musik』Munchen bei Georg Muller 1920
城戸朋子著『19世紀ジェニー・リンドというスーパースターがいた』[社会志林] Vol. 47
-2号 2000年12月 p. 1-69

利用した図書館

The British Newspapers Libray,
青山学院大学図書館, 一ツ橋大学図書館, 上智大学図書館, 法政大学多摩図書館

付録：資料

The articles concerning Jenny Lind on [The Times]
Palmer's Index to The Times Newspaper (Kraus Reprint)
1847年2月11日, 3月9日, 3月17日, 3月18日, 3月29日, 4月6日, 4月8日, 4月16日, 4月19日, 4月29日, 5月4日, 5月5日~10日, 5月10日, 6月18日~6月25日, 6月25日, 8月2日, 8月19日, 9月9日, 9月16日, 10月8日, 10月21日, 10月22日, 12月25日
1848年8月12日~14日, 8月30日~9月4日, 9月12日, 11月1日, 11月17日, 11月25日
1849年1月27日, 1月30日, 2月10日, 5月19日, 5月31日, 6月20日, 9月5日
1850年3月6日, 8月10日, 8月14日~19日~20日~21日~22日~26日, 10月1日, 11月8日, 11月27日
1858年3月31日
1862年6月23日

1873年5月5日
1883年7月4日
1887年9月30日, 11月1日, 11月3日

[The Illustrated London News]

1847年3月20日, 4月24日, 5月8日, 5月29日, 6月19日, 6月26日
1849年1月6日, 1月13日, 2月3日, 2月17日, 3月3日, 4月7日
1850年8月24日, 9月21日, 9月28日, 10月5日, 11月23日
1887年11月12日

[Punch, or the London Charivari]

1846年 Vol. 11 p. 150
1847年 Vol. 12 p. 54, p. 71, p. 165, p. 197, p. 199, p. 208, p. 220, p. 246
1847年 Vol. 13 p. 10, p. 120
1848年 Vol. 14 p. 197
1849年 Vol. 16 p. 15, p. 157, p. 175~6, p. 219, p. 235
1850年 Vol. 19 p. 145~149
1856年 Vol. 30 p. 42
1887年 Vol. 92 11月12日